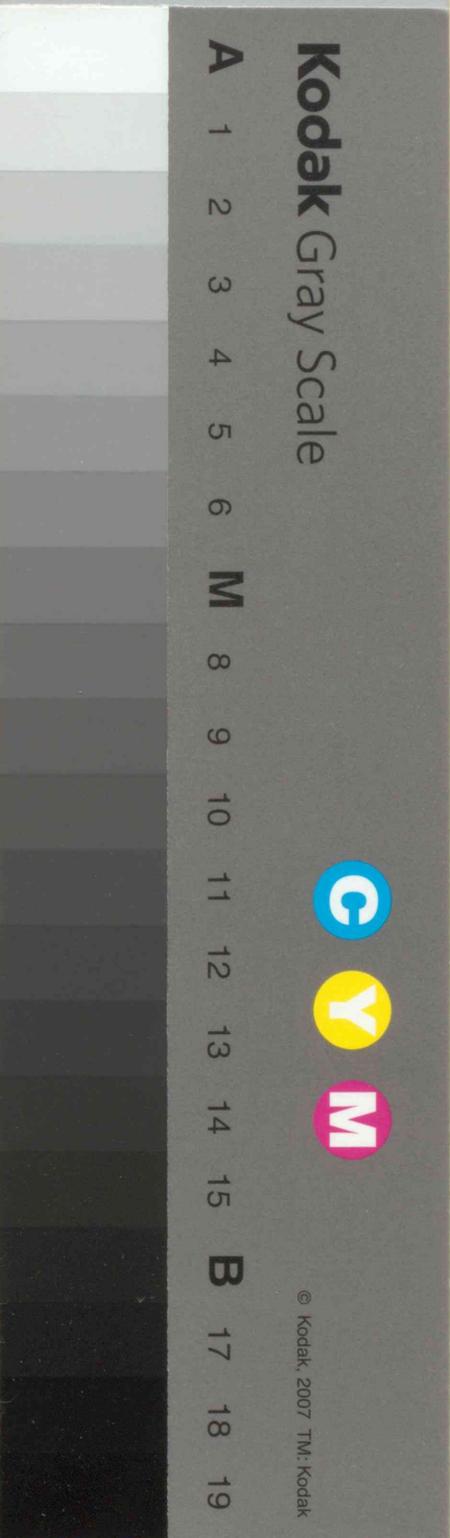
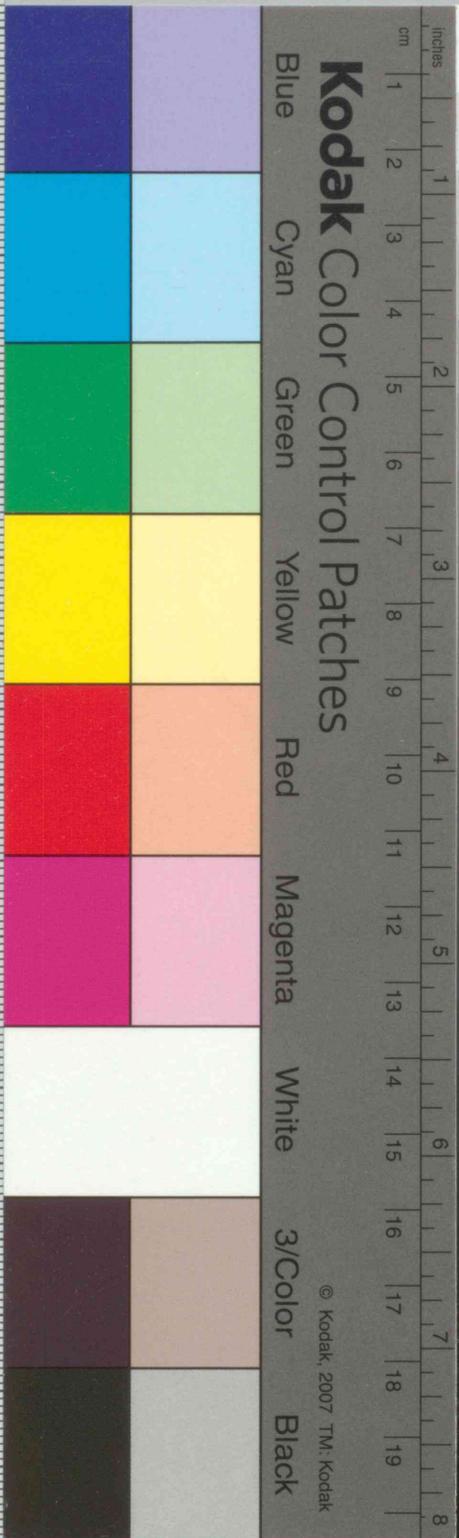
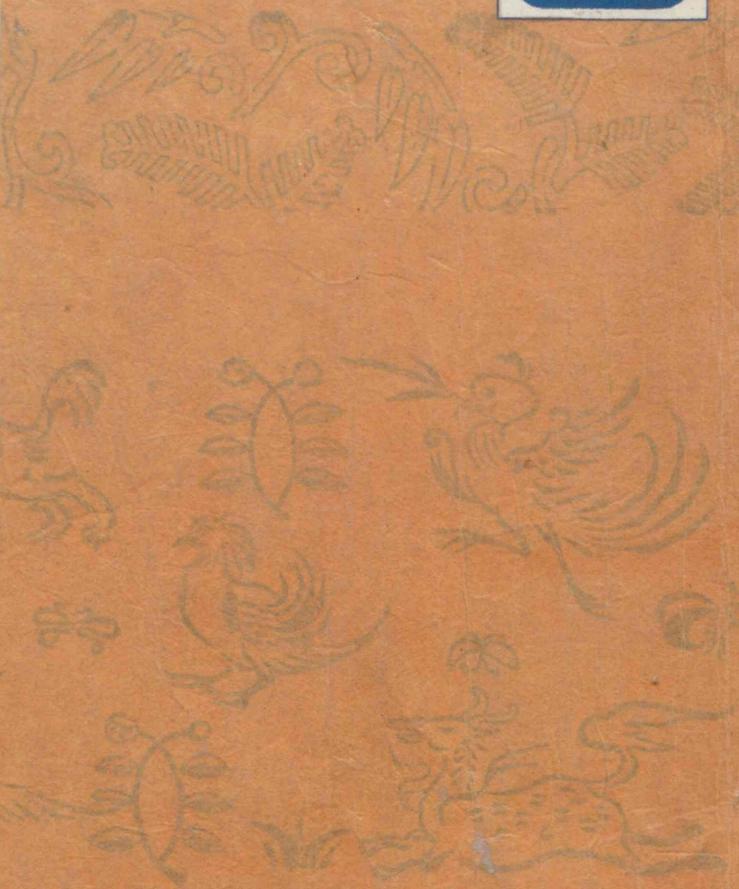


中等國語讀本

新修二版

卷七

4a
810
H25



42541

教科書文庫

4

810

44-1930

20000
9-0667

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



資料室

4a
810
AB5

濟定檢省部文

日五月七年八和昭
用科語國校學業實

日九月十年五和昭
用科語國校學中

中等國語讀本



編者

金落
子合
元直
臣文

新修二版

中等國語讀本



譜 蟲 百 一 一

路 河 駿

卷七目次

一 春と人	上田敏	一
二 國語尊重	伊東忠太	八
三 建築に現はれた美術趣味	松本亦太郎	一五
四 花月のすさび	松平定信	二〇
一、吝嗇		二〇
二、不虞の備		二二
三、ことば咎め		二三
四、餘地		二三
五 長がたな(俳句)		二四

六	光頼卿の参内	……………	(平治物語)	二七
七	芳流閣	……………	瀧澤馬琴	三五
八	太郎	……………	芥川龍之介	四三
九	築山先生に上る	……………	頼山陽	五三
一〇	火の文字	……………	薄田泣菫	五九
一一	百蟲譜	……………	横井也有	六三
一二	俚諺論	……………	大西祝	六六
一三	川柳點	……………	金子元臣	七三
一四	青年の使命	……………	山縣有朋	七九
一五	奥の細道	……………	松尾芭蕉	八三
一六	七寶の柱	……………	泉鏡花	八九

一七	神戰	……………	川端龍子	九九
一八	熊野落	……………	(太平記)	一〇九
一九	自然のあはれ	……………	吉田兼好	二六
	一、月と露	……………		二六
	二、花と月	……………		二六
	三、秋の野ら	……………		二八
	四、四季	……………		二九
二〇	附子	……………	(狂言)	二四
二一	淺茅が原	……………	(平家物語)	二九
二二	平家雜感	……………	高山樗牛	三三
	一、都落	……………		三三

二、清盛入道……………一三〇

二三 嵐も白し(和歌)……………一四〇

二四 流泉啄木……………(今昔物語)……………一四四

二五 鏡花水月……………金子元臣……………一四六
(終)

(附録) 文官服裝圖

國文學史(上古、中古)
上古、中古文學一覽

中等國語讀本 新修二版 卷七

一 春と人

生命の中流に棹さして十分に世の苦樂を味ひ、自己の意識を強めようとすることは、草木の角ぐみわたる春の日を浴びて、失はれた力キツクのとみに復歸もとのへするを感じ、新しい熱意を以て諸の印象しんさうを迎へる。郊外にも、都會にも、自然の風色に、人事の活動に、春光と生氣とが漲りわたるのだから、彼岸から八重までの櫻時ばかりでなく、木瓜も、海棠も、薔薇も、堇も、紫雲英も、蒲公英も、垣根の若葉も、鳥の聲も濃やかに懐かしくしとしとと降る春の雨、花見歸の土手の上、上潮と共に春愁をもたらず夕暮の風、さまざまな夢思はせる靜寂な池の

汀に菖蒲咲く頃も過ぎて、瑠璃色めいた碧空に、白い雲がふわふわと動いて行く春と夏との界までも、すべての景物は多感な人に迫つて来て、快くも亂り心地ならしめる。世には、動もすれば因襲に囚れて、櫻花の散るを見て春はすでに過ぎたとするものもあるが、それは眞に春の心を解したものでない。春は淺いもよく、盛もよく、閑なるもよい。

春はただ人の心を浮き立たせて、氣輕な戯に赴かしめるのではない。この時麗しい萬物は、生の惱を感じて、精力の横溢に壓迫される。そこに創作の苦痛がある。芽ばえ花咲くことは一種の緩和であつて、いはば重荷を下した時の安心に過ぎぬ。さればこの春色に對する人間の心も、萬物の活動に同情し、共鳴してここに平行した變化を感じ、偉大にして深沈たる大自然の節奏に合するのである。若し花を看てただ單純な官能の快感を貪るのみならば、同じ色の造

造花もよいか

天然の花は

それ以上は

花を見てもよい筈であるが、天然の千紫萬紅には、それ以上の深い意味がおのづから籠つてゐて、思邪なき靜觀の人心に通ずる。舊くしてしかも常に新しい春のめぐり来て、我等の今更に胸さわぎするのは、この大自然の脈搏を感じるからである。爽快な夏もおもしろく、靜閑にして豊かな秋も楽しく、寂と

上して又自ら人に勇あらしめる冬も佳いが、自然の胸を抱く春の心は年毎に變り敏なく切である。

誰がいひそめた言葉であらうか、イタ



リヤの古歌に、春は一年の若き時、若き時は一生の春とある。春を愛するは若きを愛するのだ。春を惜しむのは青年の去り易きを惜しむのだ。生と死と、美と悦と、愁と愛とを歌ふ古今の抒情詩には、老と若さとの對照がいつも伴奏をつけてゐる。ああ、少年にして智あら

ば、老年にして力あらばと、繰り返し繰り返し歌ひ續ける古の智慧を聽く毎に、春と少年とのあわただしく過ぎ行くのが惜しくて堪らぬ。けふをつかめ」とローマの詩人は教へ、手折れよ薔薇を、花咲くひまに。けふがあすある世でもなし」とドイツの詩にもいふ。この一見していかにも無分別な料簡は、尋常の道學者や、考もなく口先でこれに雷同する俗流の思ふほど、しかく思慮のない説ではない。智と力といづれか尊い。よしや智淺くとも、生命の水は汲み得られる。力なくては泉の傍へも近寄れまい。初は淺かつた智も、苦樂の經驗に依つて、終に自らを深くする例はあるが、年少にしてその世の春にふさはしい思と行とがなく、徒に老成を期して、空しく貴重な光陰を費すのは、怯にあらざれば鈍である。この類の人、たまたま老い來し方を顧みて一代の好機會を逸したのを悔む時、口にこそ出さないが、心中はさぞ残念なことであらう。

春の光の波に浮んで、のびやかに朗かに生を樂しめ、時_レが食み減らす人間の力も、萬物の復活に交感して補はれて行く。しかもまた春の樂しみには、愁もあり、悦もあり、惱もあつて、それが我等の生活力を刺戟し、促進する。かくて晩春の候、膚滑かに筋も弛んで、やや倦怠を感じるのは、勢力過剰の爲でもあらうが、續いて來る夏秋の努力に具へる準備とも思へる。年毎の春の光を身に浴びて、心の奥まで浸つて居れば、老はおのづから退散する。人若し熱情を以て春を追求したなら、その追求の間に自然と力は加はり、老はせきとめられよう。

春の恵を輕んずるのは大の料簡違である。天の與ふるを取らないと罰が當る。尤も一年中の氣候が餘り溫暖であつて、凜烈な冬の寒氣と寂寞とを痛切に感じない時は、勿體なくも春のあり難みが忘れ易くなる場合がある。例へば、日本の太平洋岸、殊に東海道及び

聖ゴタール スイス中央部に連るアルプス山脈のトンネル。長さ九哩餘。
 St.Gotharl. スイス中央部に連るアルプス山脈のトンネル。長さ九哩餘。
 アイロロ
 Airolo. 聖ゴタールのトンネルの南口。

それより西南部に住まふ人人の中には、また春が来たかぐらゐの微温な感じを抱く者もあらう。然しそれでは實にせつかくの楽しい世界を自分で狭くするものである。對照は眞に物の味ひを強めるもので、白雪の冬よりして、直に陽春の盛光に接すると、眼も眩むばかりの美に打たれることがある。往年私は歐洲觀光の途すがら、スイスから嶺南清明の天地に移らうとした時、聖ゴタールのトンネルに入る前までは、連山湖面悉く飛雪に蔽はれて、冷たい白い夢の中を通る心持であつたが、汽車が暫く暗黒道を過ぎて、忽ち青天の白光に接するや、思はず聲を揚げて南歐の美を讚歎した。アイロロといふ里にかかつた頃、南の方遙にイタリヤの平原が黄金の光に浮んで、なごのわたりかと思ふばかりなのを望んだ時、つくづく春の徳を思つた。

若い美しい娘があまりに手を大事にしてゐるのを見て、或人が

「どうせ、しまひには萎びてしまふ手ではないか」と、たしなめるつもりでいつた所、或夫人は口を挿んでいつた。しかし、今はまだ萎びてゐないと。人生に對する最も賢明な態度は、この一言に含まれてゐる。楽しい日に樂しめ、悲しみたければ悲しい日が來てからにするがよい。その時でも若し出來るなら、自分の悲しみをもつて近くの人人に氣持わるがらせずに濟ませたいものだ。傳道の士がいつた如く、すべてに時がある。播く時もある。收穫する時もある。樂しむ時もある。悲しむ時もある。そして春の日は樂しむ時である。躊躇なく、心配なく、取越苦勞なく、暢びやかに、朗かに春の生を樂しめ。

(上田敏——思想問題)

時は春。日は朝。朝は七時。

片岡に露みちて、揚雲雀なのりいで、蝸牛枝に這ひ、

神、そらに知ろしめす。すべて世は事も無し。(上田敏譯詩)

上田敏
 東京の人。文學博士。京都帝國大學教授。大正五年七月歿す。(二五三四年—二五七六年)

二 國語尊重

元來わが日本語は甚だ複雑な歴史を有する。大體に於いて、その大部分は、太古より傳來せる日本固有の言語と、漢語をそのまま取り入れたものと、又はこれを日本化したものとであつて、一部は西洋各國例へば、英、佛、蘭、獨、西、葡等の諸國の語から轉訛したもの、及び梵語系その他のものである。

近來世界の文運が急激に進展したのと、國際的交渉が忙しくなつたのとで、わが國に於いても、舊來の言語だけでは間に合はなくなつた。殊に新しい専門的術語は、多くは日本化することが困難でもあり、また不可能なものもあるので、便宜上、外國語をそのまま日本語として使用してゐるのが、澤山にあるが、勿論これは當然のこと、で、少しも差支はないのである。

然しながら、永くわが國に慣用された歴史のあるわが國語は、十分にこれを尊重せねばならぬ。國語は國民思想の交換、聯絡、結合の機關で、國民の神聖なる徽章でもあり、至寶でもある。不足な點は、適當に外國語を以て補充するのは、差支ないが、故なく舊來の成語を捨てて、外國語を濫用するのは、即ち自らおのれを侮辱するもので、以ての外の妄舉である。なかんづく、一國民の有する固有名は最も神聖なもので、妄に他から侵されてはならぬ。

わが國名は、「ニホン」又は、「ニッポン」である。外國人は思ひ思ひに勝手な稱呼を用ゐてゐるが、それは彼等の自由である。然しわが日本人が外國人等に追従して、自ら自國の名を二三にするのは、奇怪千萬である。英米人の前には、「ジャパン」と稱し、佛人に逢へば、「ジャポン」と唱へ、獨人に對しては、「ヤパン」といふは何たる陋態であらう。吾人は日常英國を、「イギリス」、獨國を、「ドイツ」と呼ぶが、英獨人は吾人に對

フォルモサ
 Formosa
 サガレン
 Saghalien
 コレア
 Korea
 ポート・アーサー
 PortArthur
 シウル
 Seoul
 マウント・モリソン
 Mount Morrison
 ソン

して自らさう呼ばないではないか。
 日本人中には、今日でもなほ外人に對して、臺灣を「フォルモサ」、樺太を「サガレン」、朝鮮を「コレア」、旅順を「ポート・アーサー」、京城を「シウル」、新高山を「マウント・モリソン」などといふ者があるのは不都合である。日本固有の地名を、外國になぞらへて呼ぶことも國辱である。例へば、曾て日本を「東洋の英國」などと誇り顔に稱へたことがある。飛驒と信濃との境を走る峻嶺を「日本アルプス」と稱し、木曾川を「日本ライン」といひ、更に甚しきは、その或地點を「日本ローレライ」などと呼ぶものがある。この筆法で行けば、富士山を「日本チンボラゾ」と呼び、隅田川を「日本テムズ」とでもいはねばなるまい。
 以上日本の固有名、殊に地名について、その理由なく改悪されることの非なることを述べたが、ここに更に寒心すべきは、吾人の日用語が、適當の理由なくして漫然歐米化されつつある事實である。

アルプス
 Alps
 中部歐洲の大
 山脈。
 ライン
 Rhine
 歐洲大河の
 一。
 ローレライ
 Lorelei.
 チンボラゾ
 Chimborazo
 南米アンデス
 山脈中の高峰
 の一。
 テムズ
 Thames
 英國の首府ロ
 ンドンに流る
 河。

これは吾人が日日の會話や新聞などにも無數に發見する。例へば、近ごろ「何何日」といふ代りに「何何デー」といふ語が一部に行はれてゐる。わざわざ「デー」といはずとも、「日」といふ美しい簡單な古來の國語があるではないか。また父母は「父様、母様」と呼んで少しも差支ないばかりか、却つて恩愛の情が籠るのに、一部の人は何を苦しんで「パパ様、ママ様」と歐米に模倣させていはせるのだらう。
 又、外國語を譯して日本語とするのは、勿論結構であるがその譯が適當でなかつたり、拙劣であつたり、不都合であつたりするものが随分多い。新に日本語を作るのであるから、これは十分に考究して貰ひたいものである。

翻つて歐米を見れば、さすがに母國語は飽くまでもこれを尊重し、英米の如きは、到る處に母國語を振り廻してゐるのである。ドイツでも、曾てラテン系の言葉を節制して、なるべく自國語を使用す

ることを獎勵した。どれだけ勵行されたかは知らぬが、その意氣は壯とすべきである。

私が曾てトルコに遊んだ時、その宮廷の常用語が、自國語でなくして佛語であつたのを見て驚いた。それでトルコの滅亡遠からずと直感したのである。インドに於いては、地理、歴史の關係から、北部と南部とでは根本から言語が違ふので、インド人同士で英語を以て會話を試みてゐる。私はそれを見て、インドが到底獨立し難い所以を悟つた。又支那の昔に於いて、塞外の鮮卑族の一種なる拓拔氏は、中國に侵入し、黃河流域の全部を占領して、國を魏と稱したが、魏は漢民族の文化に溺惑して、自ら自國の風俗慣習を改め、胡語胡服を禁じ、姓名を漢式にした。果然、彼は幾ばくもなくして漢族の爲に亡ぼされた。ひとり拓拔氏のみならず、支那塞外の蠻族は、概ねその轍を履んでゐる。

鮮卑族
支那北狄の一。
東胡の裔、蒙古種。

わが日本民族は、靈智靈能を持つてゐる。炳乎たる獨特の文化を有してゐる。素より拓拔氏や、印度人や、トルコ人などの比ではない。宜しく自國の言語を尊重して、飽くまでこれを徹底せしめる覺悟がなければならぬ。然るに今日の狀態は如何であるか。外國語研究の旺盛はまことに結構であるが、一轉して漫然たる外國語崇拜となり、母國語の輕侮となり、理由なくして母國語を捨て、頻に外國語を濫用して得意とする風が、一日は一日より甚しきに至つては、その結果は如何であらう。これ一種の國民的自殺である。

切に希ふ所は、わが七千餘萬の同胞は、互に相警めて、飽くまでわが國語を尊重することである。若し英米霸を稱すれば、靡然として英米に走り、獨國勢力を獲れば、翕然として獨國に就き、佛國優位を占むれば、倉皇として佛國に従ふならば、わが獨立の體面は何處にあるか。

伊東忠太
工學博士。東京
帝國大學名譽教
授。

私のこの意見を以て、つまらぬ些事に拘泥するものとし、或は時勢に通じない固陋の僻見とする者があつたら、私は甘んじてその譏を受けたい。そして謹んでその教を乞ひたい。(伊東忠太—木片集)

言語はこれを話す人民に取りては、恰もその血液が肉體上の同胞を示すが如く、精神上の同胞を示すものにして、これを物に譬へていはば、日本語は日本人の精神的血液なりといふを得べし。日本の國體と日本の人種とは實にこの精神的血液によりて維持せられ、結び付けらる。

國語はその國民の標識となるのみにあらず、これと同時に、また一種の教育者、即ち情深き母ともなるなり。我が生まるるや否や、この母は我我をその膝の上に迎へ取り、懇に國民的思量と、國民的感動とを教へ込みくるるなり。さればこの母の慈悲は誠に天日の如し。苟もこの國に生まれ、この國民たり、この國民の子孫たるもの、誰かこの光を仰がざるべき。(上田萬年)

三 建築に現はれた美術趣味

日本でも西洋でも、昔からある大きな建築は宗教的建造物である。アクロポリスの神殿、或は羅馬、フロレンス、ヴェニスにある寺院を西洋建築の代表とし、法隆寺や東大寺、或は比叡山あたりの寺院を日本建築の代表として、彼我相對峙せしめると、一見明かな相違が認められる。西洋の神殿、寺院は、自然界と無關係に築造せられてゐる。その建築は實に偉大華麗ではあるが、多くは人家稠密、車馬喧轟の街衢に建立せられて、天然の背景なく、樹林や水石の幽邃の風趣を添ふるものがない。然るに日本の神社、佛閣に於



殿神のスリゴロクア

アクロポリス
アテナにお
り。
フロレンス
伊太利半島北
部の首府。
ヴェニス
伊太利の港。
西暦十世紀に
は、東洋との
商業の一大中
心地なりき。
法隆寺
法相宗の大本
山。聖徳太子の
創建。奈良縣生
駒郡法隆寺村に
あり。

日本自然の景
景とし自然
ト相和が取
レテキル
山自然の
山ト和
トテソノ
ニアリ相和
ナシ

東大寺
 華嚴宗の大本
 山。聖武天皇の
 創建。奈良市に
 あり。
 比叡山
 滋賀縣と京都府
 とに跨る。山上
 に天台宗の總本
 山延暦寺あり。

シエルリング
 獨逸の哲學
 者。エナ、ミュ
 リン等諸大學
 の教授たり。
 (西曆一七七
 五年—一八五
 四年)

いては建築と天然の風光とが頗るよく調和し、それ等の建築は、自然の懷に抱かれて生長して居る趣がある。日本の建築がおもに木材を用ゐ、或は青銅の瓦や板で屋根を葺くといふことは、建築と自然界とを調和せしめる上に、深い意味を有して居る。石造建築はおもに直線から成り、且あまり堅實であるから、日本の丘陵、山嶽のやうに婉曲の形狀を有して居る溫和な風景とは、調子が合はないのであるが、木材建築及び青銅瓦の屋根は、婉曲の線で組み立てることが出來、且輕快な心持があるから、周圍の樹木や丘陵、山嶽とその形狀も色彩も頗るよく一致し、而してこの建築が星霜を重ね、自然に錆びて來ると、恰も天然生えぬきの建築のやうに見えて、天人一致の趣が真によく表現せられるのである。

シエルリングは、美術は意識、無意識の一致である。世界の幽玄な祕密が、この美術に發顯して居るといつた。蓋しこの無意識といふ



南 禪 寺 (京 都)

のは天然をいひ、意識といふのは人間の心をいふのである。自然界と人間の心、即ち天爲、人工の調和する所に、天地の祕密は露はれ、それに因つて、我我は宇宙の真相を窺ふことが出來るといふのである。この説は、わが日本の美術に於いて一層よく表現せられて居る。日本人は、美なる風景中に神明、佛陀の鎮坐することを希うて居るが、西洋人は、周圍に一本の樹木も一莖の草花も無い石造の殿堂中に、神を閉ぢ籠めようとして居る。アクロポリスの如きは、岩石の丘陵上に神殿が立てられては、あるが、その丘陵は全く礎石として用ゐられ、階段として用ゐられて居るに過ぎない。東大寺二月堂の廻廊から、南都遠近の寺院堂塔を山脚山腹、樹木煙霞の

三寶院
眞言宗古義派の
大本山。京都府
宇治郡下醍醐に
あり。

間に一望する如き幽邃な趣致は、西洋の寺院建築に就いてこれを認める事は出来ない。雅典隆盛の頃には、アクロポリスの正面の石門下の段階を登り一路神殿に通ずる所に、左右に歴史上の偉人物を大理石像として並列せしめてあつた。日本人は、山門内外の直道を樹木鬱蒼たる竝木となし、これに由つて、神殿、佛堂に近づくに先立つて人の心を森嚴ならしめた。彼は人の心を偉人化せしめようとし、我は人の心を天然化せしめようとするのである。一言にいへば、日本人は宗教的建築に於いて、自然の風光に對する愛好を離れることが出来ないものである。否、自然の風光が現はさうとして現はし得なかつた所を、建築が補つてこれを現はしたやうな趣がある。西洋の宗教建築に於いては自然は無視せられ、人間の力や考の表現が主になり、人爲は天工を壓倒する趣がある。西洋の美術的建築の様式が障壁式になり、外界を拒絶するに對し、日本の柱楹式に

南禪寺
臨濟宗の本山。
京都洛東にあ
り。

關白道長

藤原氏、兼家の
子。一條、三條
後一條、後朱雀
の數朝に仕へ、
從一位關白太政
大臣たり。その
三女は三天皇の
皇后となる。世
に御堂關白と稱
す。萬壽四年薨
す。(一八二六年
—一八八七年)
無量壽院

道長の造りたる
法成寺のうちに
在りき。

松本亦太郎

文學博士。群馬
縣の人。慶應元
年生まる。東京
帝國大學、京都
帝國大學等の教
授たりき。

なり、内外相通ずるが如きも、一は用ゐる材料の相違にも由るだらうが、一は又彼我趣味の異なるにも由ると解釋することが出来る。なほ日本の寺院建築の特色として附言すべきものがある。日本の寺院は、寺院建築と住宅建築とを巧みに調和し、これを渾化するに林泉の美を以てして居ると共に、また人間の安住する所として、佛も凡夫も一の家族となつて樂しむ極樂淨土の形相を、寺院の境内に髣髴せしめて居る。例へば醍醐の三寶院や、京都の南禪寺の如き堂内で、一日なり半日なりを過せば、人間を超脱して居る一種の和かい、楽しい、しかも寂しくない自然の世界に入つた心持がする。關白道長は晩年無量壽院に籠つて、念佛の聲を斷たず、臨終の時は彌陀の御手に通した村濃の絲を引いて、往生の本願を遂げたといふが、寺院住宅の一致といふ點から見て、甚だ興深い話である。

(松本亦太郎—渡鳥日記)

四 花月のすさび

一、吝嗇

ある吝嗇なるもの、今年に殊に物費しぬとて、および折りて敷へたてつつまづ春より秋まで、かのいたづきによりて飲める薬もか



松平定信

ばかりなり。それにかかる事もありきなば、かきいふを、つくづく聞きわたる人ど、いと去り難きがうへに、君が身に付きはむといへば、何なるかと問ふ。薬吞み給はずば、かく今日なげき事もえいひ給はじ。かくいひ給ふは薬の恵なれば、それに報い給ふを費と心得給ふか」といひき。(松平定信「花月草紙」)

松平定信
政治家。田安宗武の第七子。白河城主松平定邦の嗣となる。天明七年老中となる。後政仕して樂翁と稱し、文筆を樂しむ。文政十二年五月卒す。(二四一八年—二四八九年)

二、不虞の備

或人いづ方に火ありと聞きても、ありあふ調度など繩に結びつけて井のうちに入れ、水に入れがたき物は袋やうの物にうち入れて、かたはら去らず置きぬ。火のかく遠きを、いかでさはし給ふといへば、焼け行かば、遠きも近くなりぬべし」といふ。風よければこなたへは來たらじ」といへば、風變りなば、さはあらじ」といふに、人みな笑ひぬ。ある日いと遠方のなりしが、風とみに吹き出でて、瞬くうちに焼け擴がり、かのをのこのあたりも焼け失せぬ。火靜まりて近きあたりの者らも、の食はむとすれども器もなし」と歎けば、かのをのこしたり顔にて、

ききもききりぬと
風よくれにさへん
とて風をうらなはさ
ゆりふへわりのぬ
ききののけりし
ひりてさへん
ひりてさへん

(紙草月花)筆信定平松

「貸して參らせむ」とて、かの繩を引きたぐれば、鉞よ、櫛よなどいふ物
引き上げつ。また袋のうちより、器物などいだしつつ、つねづね人に
笑はれずば、いかでかかる時、響しつべきと云ひつるを、げにもとい
ふ人もありき。(松平定信—花月草紙)

三、ことば咎め

霜夜をわびて水鳥の啼くを、物しり顔なる人の、水鳥の轉るよと
いひけるを、同じやうなる人うち聞きて、鶯の轉るなどは聞けど、
水鳥のといふは、いと物あらたまり、珍しきことを聞きつるなとい
ふ。初の人うそぶきながら、橋姫の巻に、水鳥の羽うちかはしておの
がじし轉る聲とあるものを、と心得顔にいひたるもわるし。求めて
珍しきことをいふべきものは、蕎麥切を好み給ふやといふべき
を、河漏はいかにといへば、辛きものこそ好み侍れといへるを、問ふ
人笑ひき。知るべき人にはいひもしなむ。人をも知らず、かやうの事

橋姫の巻
源氏物語宇治十
帖のうち。

河漏

また、盆漏とい
ふ。北支那の食
品にて、わが蕎
麥切に類す。

いふは、聞き心より出づるなり」と、人のいひき。(松平定信—花月草紙)

四、餘地

「道路は足底の廣さだにあらば歩むべし」といふは、例のことわり
のみなり。いかで歩むべからむ。梁のうへを歩まば落ちぬべし。こは
かの顔氏のいひたる餘地なきなり。あまりに事に甚しく、物にせち
なれば、行はれぬのみか疎まれぬべし。こは事物に對して餘地なき
なりと聞きぬ。(松平定信—花月草紙)

童蒙抄に「或人北野に詣でて、東行西行雲渺渺、二月三日日遲遲」といふ
詩を詠じけるに、少しまどろみたる夢に「とさまにゆきかうさまにゆ
きて雲はるばる、きさらぎやよひ日うらうら」とこそ詠ずれと仰せら
れけり」とあり。昔は詩をもうるはしくはかく様にこそ讀みあげけめ
詠むるは更なり。古へはすべて唐書をよむにも讀まるるかぎり、皇
國言に讀めるは、字音は聞きにくかりしが故なり。(本居宣長)

道路は云云

顔氏家訓に「人
足所履不^レ過^二
數寸^一、然而咫尺
之途必顛^二蹶於
崖岸^一、拱抱之梁
每沈^二溺於川谷^一、
何哉、爲^二其傍
無^レ餘地^一故也。」

向井去來

名は兼時、通稱平次郎。肥前の人、京都に住し、落柿舎と號す。蕉門の高弟。寶永元年九月歿す。(二三二二年—二三六四年) 應々といへど、たたくや雪の門 去來

五 長がたな

向井去來

○ 何事ぞ花見る人のながたな。湖の水まさりけり、さつき雨。秋風や白木の弓に弦張らむ。



筆 來 去

内藤丈草

春花園凡兆 加賀の人。醫を業とす。芭蕉の門人。姓名詳ならず。 楢山杉風 名は元雅、通稱 鯉屋市兵衛。江戸深川の魚商。

○ わが事と泥鰯のにげし根芹かな。鶯や茶の木ばたけの朝月夜。時鳥鳴くや湖水のささにごり。

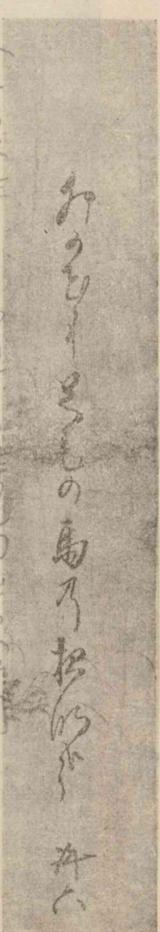
春花園凡兆

○ 渡りかけて藻の花のぞく流かな。長長と川ひとすぢや雪の原。

楢山杉風

○ 子や待たむあまり雲雀の高あがり。歌よみは下手そよれ天地の動きはたまたまは。 十圍子も小つぶになりぬ秋の風。

森川許六



筆 六 許

志田野坡

○ 長松が親の名で来る御慶かな。鯛屋貞柳 ついに行く道とは

各務支考

五 長がたな

二五

芭蕉の高弟にしてまたその保護者たり。享保十七年六月歿す。(二三〇六年—二三九一年) 森川許六 名は百仲、通稱五助、五老井と號す。近江彦根の藩士。芭蕉の高弟。正徳五年九月歿す。(二二一六年—二二七五年) 卯の花に足毛の馬の夜明哉 許六 志田野坡 越前福井の人。蕉門の高弟。元文五年正月歿す。(二三三一年—二四〇〇年) 各務支考 獅子庵と號す。美濃の人。蕉門の高弟。美濃派

はる雨や枕くづるる謠本、
牛叱るこゑに鶴立つゆふべかな。



支考筆

の祖。享保十六年二月歿す。(二三二五年—二二九一年)
うの花に笠著て行む川むかひ
支考

惟然坊

廣瀬氏、美濃の人。芭蕉の高足。寶永七年五月歿す。(一二三七年)

中川乙由

通稱圖書。伊勢山田の人。初芭蕉に、後涼菟に學ぶ。元文四年八月歿す。(一二三九九年)

踏みゆくや水田のうへの天の川。

○

惟然坊

浮草や今日はあちらの岸に咲く。

○

中川乙由

鍬さげて叱りに出るや桃の花。

○

岩田涼菟

雪の日やあれも人の子樽ひろひ。

○

安藤冠里

岩田涼菟
名は正致。伊勢山田の神官。芭蕉の高弟。享保二年四月歿す。(一二三一九年—二二二七年)
安藤冠里

名は友信、對馬守と稱す。奥州岩城平の藩主。將軍吉宗の時老中たり。享保十七年七月卒す。(一二三二年—二二三九年)

十二月十九日
平治元年。

光賴

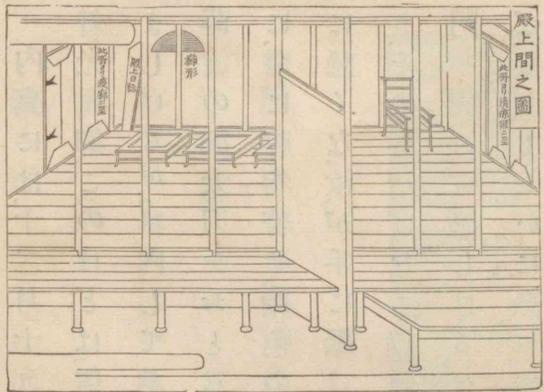
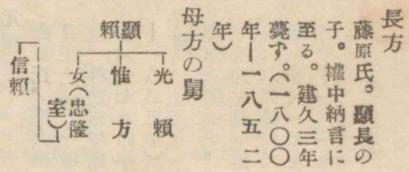
藤原氏。權大納言正二位に進み、承安三年歿す。(一七八四年—一八三三年)

信賴

藤原忠隆の子。平治元年亂を作し、六條磯にて斬らる。(一七九三年—一八一九年)

六 光賴卿の參内

内裏には、十二月十九日公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光賴卿、このほどは、信賴卿の舉動過分なりとて不參にておはしましけるが、參内して承はらむとて、殊にあざやかに束帶引き繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹巻著せ、雑色の装束に出で立たせ、自然の事もあらば人手に懸くな。汝が手に懸けて光賴が首をば急ぎ取れとて、御身近く置き、その外清げなる雑色四五人召し具して、大軍陣を張りて處處門門を固め守護しけるを事ともせず、前高らかに追はせて入り給へば、兵共も大いに恐れ奉り、弓をひらめ矢をそばめて通し奉る。紫宸殿の後を経て殿上をめぐりて見給へば、信賴卿一座して、その座の上藹達みな下にぞ著かれたる。光賴卿、こは不思議の事かな、



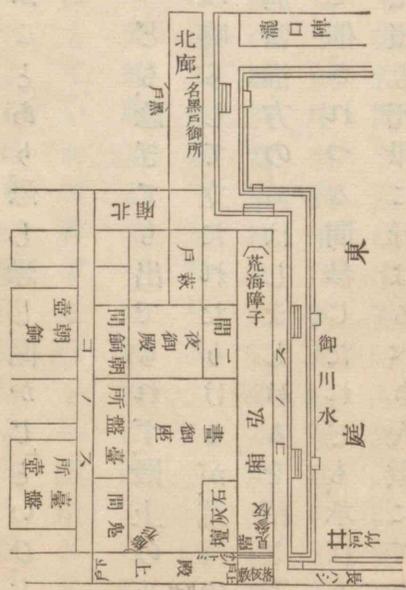
殿の上の間

人はいかに振舞ふとも、あれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には著くまじきものをと思はれければ、左大辨宰相長方卿末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそよにしどけなう見えて候へ」と色代して、しづしづと歩み、信賴卿の上にもずと著き給ふ。光賴卿は、信賴卿の爲には母方の舅なる上、大力の剛の人なれば、殊に畏れて見えられけり。右の袖に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、著座の公卿、あなあさましと見給ふに、光賴卿下襲の尻引き直し、衣紋繕ひ笏取り直し、氣色して、今日は衛府督が一座すると見えて候ふ。召に參ぜざらむ者をば死罪に行はるべしとやらむ承は

長方
藤原氏。顯長の子。權中納言に至る。建久三年薨す。(一八〇〇年—一八五二年)
母方の舅
光賴
頼朝
頼朝の弟。驍勇を以て稱せらる。永承三年卒す。(一六二八年—一七〇八年)
頼信
源満仲の長子。英武驍勇、世に冠たり。治安元年卒す。(一一六八年—一一八一年)

りて參内する所なり、抑、何事の御説ぞと問はれけれども、信賴卿物も宣はず、著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經てつい立ちて、悪しう參つて候ひけり」として、しづしづと歩み出でられけり。

庭上に充ち満ちたる兵共、これを見奉りて、あはれこの殿は大剛の人かな。さんぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に著く人一人もおはしまさざりつるに、し出だしたることよ。門を入り給ふより聊かも臆したる體も見え給はず。あはれこの人を大將として合戦せば、いかばかりか頼もしからむ」と申せば、傍なる者、昔頼光、頼信とて源氏の名



惟方

藤原氏。平治の亂信賴に與せしが、藤原經宗と謀り、二條天皇を奉じて六波羅に至る。(一七八五年)

少納言入道

名は通憲。出家して信西と號す。鳥羽崇徳、近衛、後白河の四朝に仕へて少納言となる。平治の亂に殺さる。(一八一九年)

神樂岡

京都府愛宕郡。

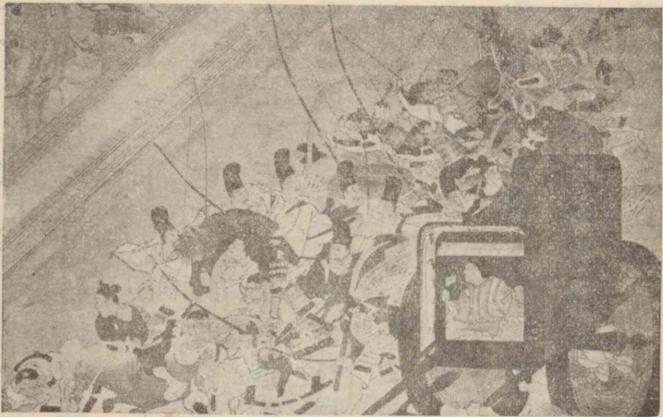
將おはしましき。その頼光を打ち返して光頼と名告り給へば、これも剛にましますぞかしといへば、又傍より、などその頼信を打ち返して信賴と附き給ふ右衛門督殿は、あれほど臆病にはおはしますといへば、「壁に耳、天に口」といふことあり、恐し恐し、聞かじ」といひながら、皆忍笑に笑ひけり。

光頼卿かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小部の前、見參の板高らかに踏み鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしましけるを招き寄せて宣ひけるは、「公卿僉議とて催されつる間參じたれども、承はり定めたる事もなし。誠やらむ、光頼も死罪に行はるべき人數にてある。傳へ承はる如きは、その人みな當時の有識、然るべき人共なり。その内に入らむこと甚だ面目なるべし。さても、先日右衛門督が車の尻に乗りて、少納言入道が首實檢の爲に神樂岡へ向はれけるは

如何に。以ての外然るべからざる舉動かな。近衛大將、檢非違使別當

は他に殊なる重職なり。その職に居ながら人の車の尻に乗り給ふこと、先蹤も未だ聞き及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中首實檢は甚だ穩便ならずと宣へば、別當、それは天氣にて候ひしかばとて赤面せられけり。

光頼卿重ねて、「こは如何に、敕諭なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。われらが曩祖、勸修寺内大臣、三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君すでに十九代、臣また十一代、承はり行ふ事はみなこれ徳政なり。一度も惡事に從はず、當家はさせる



平治物語繪卷

勸修寺内大臣
藤原高藤。(一四九八年—一五六〇年)
三條右大臣
高藤の子定方。
(一五三三年—一五九二年)

英雄
英雄家の略。

切目の宿
和歌山縣日高郡
切目村。

主上
二條天皇。
上皇
後白河上皇。

英雄にはあらざれども、ひとへに有道の臣に伴ひて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかる程の事はなかりしに、御邊始めて暴惡の臣にかたらはれて、累家の佳名を失はむこと口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳せ上るなるが、和泉、紀伊、伊賀、伊勢の家人等待ち受けて大勢にてぞあんなる。信賴卿がかたらふ所の兵若干ならじ。平家の大勢押し寄せて攻めむには、時刻をや回らすべき。若しまた火などを懸けなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地とならむだにも朝家の御歎なるべし。如何にいはむや、君臣ともに自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡、この時にあるべし。右衛門督は、御邊に大小事を申し合はするとこそ聞ゆれ。相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて、主上は何處におはしますぞ。黒戸の御所に、上皇は、一本御書所に、内侍所は、えんめい濫明殿に、

黒戸の御所
清涼殿の北廊の
一間。

許由
箕山の隱士。堯の天下を譲らんとし、耳を聞き、耳の汚なりとて、潁川の水に耳を洗ひたりといふこと、事文類聚に見ゆ。

「劔璽は何處に、夜のおとどに」と、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。また、朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞと宣へば、それには右衛門督住み候へば、その方ざまの女房などぞ影ろひ候ふらむと申されければ、光賴卿聞きもあへず、世の中は今かくござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信賴住み、君をば黒戸の御所に遷し參らせたり。末代なれども、さすがに日月はいまだ地に墮ち給はぬものを、天照大神、正八幡宮は、王法を如何に守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありといへども、わが朝にはいまだかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かなとて、のろのろしげに憚る所なく口説き給へば、惟方は人もや聞くらむと、よに凄じげに立ちたりけり。光賴卿且は悲しくて、われ如何なる宿業に因りてかかる世に生まれ會ひ、憂きことをのみ見聞くらむ。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を見聞かむ輩

は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ」とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信賴卿の座上に著かせられし時は、さしもゆゆしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、打ち萎れてぞ出で給ひける。

(平治物語)

義朝重代のつはものたりし上、保元の勳功棄てられ難く侍りしに、父の首を斬らせたりしこと、大いなる科なり。古今にも聞かず、和漢にも例なし。勳功に申しかふとも、自ら退くとも、などか父を申し助くる道なかるべき。孝行缺けはてにければ、いかでか終にその身を全くすべき。滅びぬることは天理なり。およそかかる事は、その身の科はさることにて、朝家の御あやまりなり。よくよく思案あるべかりける。事にこそ。孟子に譬を取りていへるに、舜の天子たりし時、その父瞽瞍人を殺すことあらむに、時の大理なりし皋陶捕へたらば、舜はいかがし給ふべきといふに、舜は位を棄てて、父を負うて去りなましとあり。大賢の教なれば、忠孝の教あらはれて面白く侍り。保元よりこの方、天下亂れて武勇さかりに、王位かろくなりぬ。いまだ太平の世に還らざるは、孝行のやぶれそめしによれる事とぞ見えける。(神皇正統記)

雨降

雨降は... (後定)

七 芳流閣

古の人謂はずや、禍福は糾へる繩のごとしと。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。こは福の倚る所はた禍の伏する所、彼にあれば此にありとは思へども、豫てより誰かよくその極みを知らん。憐むべし犬塚信乃は、親の遺言記念の名刀、心に占めつ身につけつ、艱苦のうちを年を経て、得難き時を得てければ、遙遙滸我へ齋して、名を揚げ家を興すべかりつる、その福は禍と降りかはりたる村雨の刃は故の物ならで、我が身を劈く譬となる、憾をここに釋く由もなく、事急にして意外に出づ。僅に當座の辱を避けなんと思ふばかりに、許多の圍みを切り開きて、芳流閣の屋の上に攀ぢ登れども、とにかくに脱れ去るべき道の無ければ、其處に必死を極めたる、心の中は如何ならん、思ひ遣るだにいと傷まし。

禍福は云々

漢書賈誼傳に、「禍之與福、何異糾纏。」

福の倚る所云云

老子に「禍兮福所伏、福兮禍所倚、孰知其極。」

滸我

千葉縣猿島郡古河。

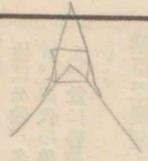
されば又犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月ごろ獄舎に繋かれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にかからん捕手の役儀、犬塚信乃を搦めよとて、なまじひに擇みいだされつ。他の憂を身の面目に、今更用ゐられん事、願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く彌高き彼の樓閣は三層なり。その二層なる屋の上まで、身を翳ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へがたき、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の、火照を渡る敷瓦は、うねり隙なく波に似て、下には大河滔滔たる、ここ生死の海に入る、流は名に負ふ阪東太郎、水際の小船楫を絶えて、進退既に谷れる敵にしあれば、いかで我繋ぎ留めんと、颯の木傳ふ如くさらさらと、登り果てたる三層の屋根にはまぶしさす由もなく、かたみに隙を窺ひつつ、睨まへあうて立つたる有様、浮圖の上なる鶴の巢を、大蛇の狙ふに似たりけり。

阪東太郎
利根川の別稱。

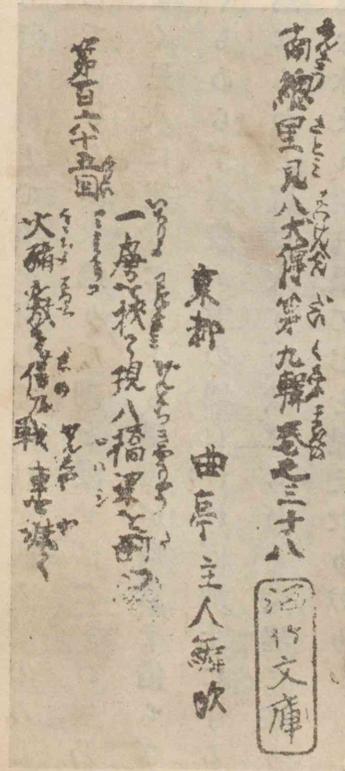
成氏朝臣 足利氏。持氏の子。鎌倉管領。後古河に住み古河公方と稱す。明應六年卒。(一一二一五七年) 墨氏 名は翟。周代の學者。魯殿 姓は公輸、名は般。周代の魯の人。故に魯殿といふ。 膳臣巴提便 欽明天皇の朝の人。百濟に使し、雪夜幼兒の虎に食はれたるを憤り、虎穴を探りて虎を獲たり。 富田の三郎 和田義盛の臣。將軍實朝の御前にて、二箇の大鹿角を重ねて折る。

廣庭には成氏朝臣、横堀史、在村等の、老黨若黨圍繞せる、床几に腰を打ち掛けて、勝負いかにと見上げたり。又閣の東西には、腹巻したる許多の士卒、槍長刀をかがやかし、或は箭を負ひ弓杖突き立て、組んで落ちなば撃ち留めんとて、項を反してこれを觀る。然のみならず、外方は、連綿として杳なる、河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃、武事長け力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず、魯般が雲の梯なれば、地上に下るべくもあらず、かれ鳥ならねど羅に入りぬ獸ならねど狩場に在り、三寸息絶えなば、事みな休まん、脱れ果てじと見えたりけり。 そのとき信乃思ふやう、初層二層の屋の上まで追ひ登らんとせし兵等を、切り落しつるその後は、絶えて近づく者なきに、今唯獨登り來ぬるは、世に覺ある力士ならん。きやつはこれ膳臣巴提便が、虎を暴にせし勇あるか、また富田の三郎が、鹿の角折りし力あるか、遮

方棟
箱に紐も
にした大棟



莫一人の敵なり、引つ組んで刺し違へ、死ぬるに難き事やはある、よ
 き敵にこそござんなれ、目に物見せんと血刀を、袴の稜もて推し拭
 ひ、高嶺のごとき方棟に、立つたる儘に寄するを待てば、見八も亦思
 ふやう、彼の犬塚が武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり、さりとても
 搦めかねて、他の
 援を借ることあ
 らば、獄舎の中よ
 りこの役儀に、擇
 り出されつるか
 ひも無し、搦め捕
 るとも撃たるとも、勝負を一時に決せんと、思ひにければちつとも
 擬議せず、御説ごせつざふにと呼び掛けて、持つたる十手を閃かし、飛ぶがご
 とくに方棟の左の方より進み登りて、組まんとすれども寄せ附け



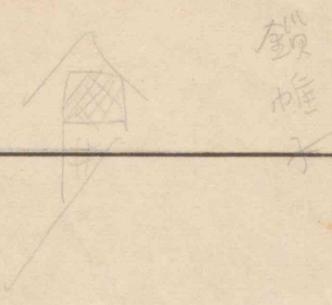
稿原の琴馬

ず、心得たりと、鋭き太刀風に、撃つをはつしと受け留めて、拂へばす
 かさずこむ刀尖を、支へて流す一
 上一下、滑る藁を踏み止めて、頼に
 進む捕手の祕術、彼方も劣らぬ手
 練の働、嵩より落す太刀筋を、あち
 本こち外す、虚虚實實、いまだ勝負を
 挿わかざれば、廣庭なる主従士卒は、
 手に汗握らざるもなく、瞬もせず
 氣を籠めて、見る目もいとどはる
 かなり



見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば勇氣彌増して、刀尖より火
 出づるまで、寄せては返す太刀音掛聲、兩虎深山に挑む時、颯然とし

て風發り、二龍青潭に鬪ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峯の霞か、夏ならば夕べの虹か、と見るばかりなる、いと高き屋の棟にして、死を争へる爲體、世に未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鑲肱當のはづれを、裏缺くまでに切り裂かれたれど、太刀を抜かず、信乃は刀の刃も續か、で、初に淺痕を負ひしより、次第に疼を覺ゆれども、足場を計りて、撓まず去らず、疊みかけて、撃つ太刀を見、八右手に受け流して、返す拳に付け入りつつ、やつと掛けたる聲と共に、肩間を望みては、たと打つ、十手をちやうと受け留むる、信乃が刃は、鏢際より、折れて遙に飛び失せつ。見八得たりと、むんづと組むを、そが儘左手に引き著けて、かたみに利腕しかと取り、振ぢ倒さんと、えい聲合はせて、揉みつ揉まるる力足、これかれ齊しく踏みすべらして、河邊の方へころころと、身を輾ばせし覆車の俵、阪より落すに異ならず、勾配險しき棧閣に、削り成したる藁の勢、とどまるべく



もあらざめれど、かたみに執つたる手を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙なる河水の底には入らで程もよし、水際に繋げる小舟の中へ、打累なりつつどうと落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水煙纜ちやうと張り切つて、射る矢の如き早河の眞中へ吐き出されつ。しかも追風と引く潮に、誘ふ水なるくだり舟、行方も知らずなりにけり。(瀧澤馬琴——南總里見八犬傳)

嫁のお路は人竝ににじり書もすなれば、教へて代寫させせばやと、漸く思ひ返しつ、第七十七回の中、音音が、大茂林濱にて再生の段より、代筆せさせて、一字毎に字を教へ、一句毎に假名遣を誨ふるに、婦人は普通の俗字だも知るは稀にて、漢字雅言を知らず、假名遣てにをはだにも辨へず、偏傍すら心得ざるに、唯言語をのみもて教へて書かするわが苦心はいふべくもあらず。まいて教をうけて書くものは、夢路をたどる心地して、困じて果てはうち泣くめり。(瀧澤馬琴)

瀧澤馬琴

江戸の小説家。名は解、通稱清左衛門、雅號して篁民といふ。嘉永元年十一月歿す。小説及び隨筆の著頗る多し。(二四二七年—二五〇八年)

八太郎

華山は歸つた。

その後で、馬琴はまだ残つてゐる興奮を力に、八犬傳の稿をつぐべく、何時ものやうに机に向つた。先を書きつづける前に、昨日書いた所を一通り読み返すのが、彼の昔からの習慣である。そこで彼は、今日も細い行の間へ、べた一面に隙間もないほど朱を入れた何枚かの原稿を、氣をつけてゆつくり読み返した。すると、何故か書いてあることが、自分の心持とぴつたり合はない。字と字との間に不純な雑音が潜んでゐて、それが全體の調和を到る所で破つてゐる。彼は最初それを自分の癩が昂ぶつてゐるからだとして解釋した。

「今のおれの心もちが悪いのだ。書いてある事は、どうにか書き切れる所まで書き切つてゐる筈だから。」

華山 志士。畫家。渡邊氏、名は靜定。三河田原侯の世臣。夙に蘭學を修む。缺舌小説。憤機論を著し、幕府の忌諱に觸れて禁錮せられ、累を君侯に及ぼすを恐れ、天保十二年十月自殺す。(二四五三年—二五〇一年)

さう思つて、彼はもう一度読み返したが、調子の狂つてゐる事は前と一向變りはない。彼は老人とは思はれない程、心の中で狼狽し出したのである。

「このもう一つ前はどうかだらう。」



澤馬琴

彼はその前に書いた所へ眼を通した。するとこれも亦徒に粗雑な文句ばかりが、糅然として散らかつてゐるのみである。彼は更にその前を讀んだ。さうしてまたその前の前を讀んだ。

しかし讀むに従つて、拙劣な布置と亂脈な文章とは次第に眼の前に展開して來る。そこには、何等の映像をも與へない叙景があつた。何等の感激をも含まない詠歎があつた。さうして又、何等の理路をも辿らない論辨があつた。彼が數日を費して書き上げた何回分

華山のあやまらう

の原稿は、いまの彼の眼から見ると、悉く無用の饒舌としか思はれない。彼は急に心を刺されるやうな苦痛を感じずにはゐられなかつた。

「これは初から書き直すより外はない。彼は心の中でかう叫びながら、忌忌しさうに原稿を向へ突きやると、片肘突いてごろりと横になつた。が、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼はこの机の上で、弓張月を書き、南柯夢を書き、さうして今は八犬傳を書いた。この上にある端溪の硯、螭の文鎮、臺の形をした銅の水差、獅子と牡丹とを浮かせた蒔繪の硯箱、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立、さういふ一切の文房具は、皆彼の創作の苦しみに久しい以前から親しんでゐる。それらの物を見るにつけても、彼は自ら今の失敗が、彼の一生の勞作に暗い影を投げるやうな、彼自身の實力が

端溪の硯
支那廣東省肇慶府の東にある端溪から出る硯

三七全傳
苗屋半七

燎原

遼東の豕

後漢書朱浮傳に「漁陽太守彭寵、兵攻浮、貴、彭寵書曰、伯通自伐以爲功、高天下、往時遼東有豕、生子白頭、異而獻之、行至河東、見群豕皆白、懷懼、還、若以子之功、論於朝廷、則爲遼東之豕也。」

根本的に怪しいやうな忌はしい不安を禁ずる事が出来ない。

「自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり事によると、人竝に己惚の一つだつたかも知れない。

かういふ不安は、彼の上に何よりも堪へ難い、落莫たる孤獨の情を齎した。彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には、常に謙遜であることを忘れるものではない。が、それだけに又、同時代の屑屑たる作者輩に對しては傲慢であると共に、飽くまでも不遜であるのである。その彼が、結局自分も彼等作者輩と同じ能力の所有者だつたといふ事を、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたといふ事を、どうしてやすやすと認められよう。しかも彼の強大な「我は、悟」と「諦め」とに避難するには、餘に情熱に溢れてゐるのである。彼は机の前に身を横たへたまま、親船の沈むのを見る難破した船長の眼の如く、失敗

した原稿を眺めながら靜かに絶望の威力と戦ひ續けた。
もしこの時彼の背後の襖がけたたましく開け放されなかつたら、さうして、

「お祖父様唯今、

といふ聲と共に、柔かい小さな手が彼の頸へ抱き付かなかつたら、彼は恐らくこの憂鬱な氣分の中に、何時までも鎖されてゐたことであらう。が、孫の太郎は襖を開けるや否や、子供のみが持つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よく飛び上つた。

「お祖父様唯今、

「おお、よく早く歸つて來たな。

この語と共に、八犬傳の著者の皺だらけな顔には、別人のやうな悦が輝いた。

茶の間の方では、癩高い妻のお百の聲や、内氣らしい嫁のお路の

宗伯

琴嶺と號す。醫
を以て松前侯に
仕ふ。天保六年
五月歿す。(二四
五八年—二四九
五年)

聲が、賑かに聞えてゐる。時時太い男の聲がまじるのは、折から俸の宗伯も歸り合はせたらしい

太郎は祖父の膝に跨りながら、それを聞き澄ましでもするやうに、わざと眞面目な顔をして天井を眺めた。外氣に曝された頬が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはりが息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父様にね、

栗梅の小さな紋付を著た太郎は、突然かう云ひ出した。考へようとする努力と、笑ひたいのを耐へようとする努力とで、厩が何度も消えたり出來たりする。それが馬琴にはおのづから微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日、

「うん、よく毎日、

「御勉強なさい、

絲鬢
頂を廣く剃り下
げ、兩の鬢を絲
の如く狭く残し
て結びたる男子
の鬢。

馬琴はとうとう噴き出した。が、笑の中ですぐ又語を繼ぎながら、

「それから。」

「それから、ええと、癩癩を起しちやいけませんつて。」

「おやおや、それきりかい。」

「まだあるの。」

太郎はかう云つて、絲鬢の頭を仰向けながら、自分も亦笑ひ出した。眼を細くして、白い齒を出して、小さな鬢を寄せて笑つてゐるのを見ると、これが大きくなつて、世間の人間のやうな憐むべき顔にならうとは、どうしても思はれない。馬琴は幸福の意識に溺れながら、こんな事を考へた。さうしてそれが、更に又彼の心をくすぐつた。

「まだ何かあるかい。」

「まだね、いろんな事があるの。」

「どんな事が。」

「ええと、お祖父様はね、今にもつとえらくなりますからね。」

「えらくなりますから。」

「ですからね、よくね、辛抱おしなさいつて。」

「辛抱してゐるよ。」

馬琴は思はず眞面目な聲を出した。

「もつと、もつと、ようく辛抱なさいつて。」

「誰がそんな事を云つたのだい。」

「それはね。」

太郎は悪戯さうに、ちよいと彼の顔を見た。さうして笑つた。

「だあれだ。」

「さうさな、今日は御佛參に行つたのだから、御寺の坊さんに聞いて來たのだらう。」

「違ふ。」

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰を擡げながら、顎を少し前へ出すやうにして

「あのね。」

「うん。」

「淺草の觀音様がさう云つたの。」

かう云ふと共に、この子供は家内中に聞えさうな聲で、嬉しさうに笑ひながら、馬琴に捉まるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛び退いた。さうしてうまく祖父をかついだ面白さに、小さな手を叩きながら、ころげるやうにして茶の間の方へ逃げて往つた。

馬琴の心に嚴肅な何物かが刹那に閃いたのは、この時である。

彼の唇には幸福な微笑が浮んだ。それと共に、彼の眼には、何時か涙が一ぱいになつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は又母が教へてやつたのか、それは彼の問ふ所ではない。この時この孫の

口から、かういふ語を聞いたのが不思議なのである。

觀音様がさう云つた。勉強しろ、癩癩を起すな、さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十何歳かの老藝術家は、涙の中に笑ひながら、子供のやうになづいた。(芥川龍之介—傀儡師)

芥川龍之介
文學者。東京市
の人。昭和二年
七月歿す。(二五
五二年—二五八
七年)

文藝は人生の大問題を具體的に明かにするのである。我我は如何なる目的に向つて進むべきものであるか、如何なる理想を立つべきものであるか、現に我我の生息してゐる社會は如何なるものであるか、過去に於いて如何なる發達變遷を遂げ來たつたものであるか、將來如何に發展してゆくべきものであるか、これ等の種種の問題を直觀的に美しく面白く、我我の目前に提出してくれるものは文藝である。而して人格の大なる作家ほど、我我はその感化を享けることが大なるのである。(藤代禎輔)

これは文化七年七月二十六日附の書簡なり。作者、當時年三十一。
築山先生
通稱嘉平。山陽の武術の師なり。

父
名は惟寛、春水と號す。安藝竹原の人。召されて藩の儒員となる。(二四〇六年—二四七六年)

九 築山先生に上る

幸便に任せ一筆申し上げ奉り候。殘暑の節益御勇健に御座あそばされ候ことと存じ奉り候。

去臘は色色と御世話下され、御別の刻も御親切の條條、肝に銘じ忘れ難く候。さてこの度、内内心事申し上げたき儀これあり候。誠に父儀土民より御取立を被り、外諸士よりも御國恩海山に御座候へば、その子たる者粉骨壘身仕り候うて御奉公申すべき筈に御座候ところ、只今の身分に相成り、いたし方これなく、又假令再び御使ひ下され候儀萬一出來仕り候とも、生得多病弱質すこしの事にも耐へ兼ね候故甚だ覺束なく、強ひて相勤め候うては却つて事を傷り、不忠、不孝を増し候やうのこと出來致し候やも測りがたく、且又私一家重疊に官祿を忝う仕

り候ゆゑ、一人は浪人仕る方、天道にもかなひ申すべく候はんか。又奉公仕らずとも、御報恩のいたし方これなしとは申すべからず候。經書講釋等は不得手の儀、得手と申しては史學、文學に御座候。これにて少少なりとも御國の御用に相立ち候儀仕りたく、乃ち籠居以來日本外史と申す武家の記録二十二卷著述成就仕り居り候へども、これは區區たるものにて、引用の書ども不自由、私心に満ち申さず候。愚父壯年のころより、本朝編年の史輯め申したき志に御座候ひしが、官事繁多にて、十枚ばかり致し置き候ままにて相止め候。私儀幸ひ閑人に御座候ゆゑ、父の志を繼ぎこの業を成就仕り、日本にて必要の大典は藝州の書物と人に呼ばせ申したき念願に御座候。この儀三都に居り申し候うて、書物を廣く取り集め、多聞の友を多く取り申さずては出來仕らぬことに御座候。水戸の日本史なども、江戸

福山
備後國福山藩
藩主は阿部氏。

に史館御建てあそばされ候はこのわけに御座候。不肖の私に御座候へども、右の場所へ出でて、名儒、俊才に附合も致し、學業成就、名を天下に揚げ、末代までも「藝州に何某」と呼ばれ候はば、螢火にて月光を増し候譬にて、すこしは御國の光ともなり申すべきか。
去冬此方へまゐり候件、私好み申さざる事に御座候へども、已に家長より願ひ出で候儀、今更辭退も仕りがたく、急に追ひ立てられ罷り越し候。誠に草原にて、馬子、牛飼の外は談話仕り候べき人もこれなく候。廣島に居り候ひし節は、また時節もこれあり候はば、都會へ出づることとやと、空頼みに存じ候ひしが、今はその頼みも絶え果て候ゆゑ、日夜悲歎仕り居り候。然る處福山の公邊にて私を取り放し申さざるやうと、役人共かれこれ談合仕り、私に知行取らせ、士儒に取り立て申したき

菅先生

菅茶山。詩人。儒者。名は管仲、通稱大中、備後神邊の人。寛政十年八月歿す。二二七九年一四五八年

雲邪山邪吳邪
越水天琴鄭青
一髮、萬里泊、
舟天草洋、煙
横、蓬窓、日漸
沒、瞥見大魚
波間跳、太白
當、船、明似、
月、西遊舊作
書、爲、三山内彈
正公子、時己
丑九月去、遊
時、己、十二
矣。襄
加賀
金澤藩主前田
家。

旨、内意菅先生より申し聞かせられ候。先生には、私所存をば承知これなく、承引仕るべき旨勸められ候。私答へ候に、これは案外のことを承はり候。私奉公出來候身に候はば、本國にて仕り申すべき筈なれば、如何やうの御勸にても決して従ふべきや

雲邪山邪吳邪越水天琴鄭青一髮萬
里泊舟天草洋煙横蓬窓日漸沒瞥見
大魚波間跳太白當船明似月
西遊舊作書爲三山内彈正公子時己
丑九月去遊時己十二年矣襄

筆陽山願

う御座なし」と答へ候に、これは小國ゆゑきらひ候か、小國にても俸祿はよろしと申され候ゆゑ、私は義の一字を申し候。義に協ひ申さざる儀に候はば、假令加賀、薩摩より所望にあづかり候とも、見向も仕らぬ料簡に御座候。大恩の本國に尺寸の勞を

薩摩
鹿兒島藩主島津
家

も盡し申さず、他國にておめおめと出仕候こと、私畜生ならば
知らず、苟も人にて御座候上は、何の面目にて天下の人に對し
申すべきかと申し切り候。

右様の儀は幾重にも相ことわり、この方申分相立て候ことも
これあるべく候へども、私多年の願望遂げ候期はこれなきや
うに相見え候。何分年少氣銳のうち、一度大處へ出で、當世の
才俊と呼ばれ候者共と勝負を決し申したく存じ奉り候。家父
叔父共は、御承知の氣遣ひ手に御座候ゆゑ、とかく手放し候こ
と致しかね、爰許にても兄弟同様の太中にあづけ置き、その内
に年も寄り候はば、分別なほり申すべしと心組み候へども、私
は若氣のみにてはこれなく、前段の大志御座候ゆゑに御座候。
この念願と申すも、人にすこしも世話をかけ、物入をさせ候こ
ともこれなく、唯一言の許を受け候はば、私一分の才覺を以て、

叔父

春風、杏坪等。

太中

菅茶山のこと。

一人口食ひ候ことは如何とも仕り、家元よりの仕送等は一錢
も煩はし申さぬつもりに御座候。

家父老年に相成り候うて、他處へ罷り越し候儀いかがに御座
候へども、此處に居り候も、京、大阪へ参り居り候も、五十歩、百歩
のちがひに候。此處にかれこれと月日を積み候うち、菅先生養
育の恩義は、日日おもり候うて、去りがたく相成り申すべく、さ
りとても多年の念願無に仕り候も、残念至極、いかが仕るべき
かと案じ煩ひ居り申し候。何卒尊公様の御憐愍にて、一人一人御
救ひ下され、本意を遂げさせ下され候ことは、出来申すまじく
や。さやうにも相成り候はば、英氣は百倍仕り、多病の身も學問
出精、天下の人に一人も追ひ付かせ申さざる料簡に御座候。
かやうの存念、廣島にをり候ひし節より申し上げたたく存じな
がら、憚おほく、時節も到來仕らずと存じ、黙止仕りをり候へど

も尊公様ならではこの儀御決斷下され候人はこれなく候ゆ
 るこの度憚を顧みず生涯の浮沈と覺悟相極め申しあげ候懼
 れながらよくよく御勘辨下され何卒尊公様の御心附として
 仰せ出され下さるべくもし尊公様御取計にて私生涯の大望
 御遂げさせ下され候はばこの御恩生生世世忘却仕るまじく
 候心事盡し難し萬萬御推察あそばされ下さるべく候。頓首
 敬白。(頼山陽)

頼山陽
 儒者。春水の子。
 名は襄、通稱久
 太郎。安藝の人。
 京都に住む。詩
 文に長じ、史に
 通ず。天保三年
 九月歿す。(二四
 四〇年—二四九
 二年)

今の文章の多くは偽文のみ。意誠語朴の眞に人を動かすもの極めて
 稀なり。嗚呼希望といひ慰藉といふ、いづれも人生の最大事實なり。自
 らの血と涙とを以てこれを解釋したる人にして、初めてこれを口に
 するを得ん。文字は符號のみ。それを註解するものは作者自らの生活な
 らざるべからず。文は是に至りて畢竟人なり、命なり、人生なり。ああ、今
 の時墨工、槩人の類にして、詩人と稱し、文學者と號するもの何ぞ一に
 多きや。(高山樗牛)

一〇 火の文字

下賀茂の某氏の宅を出たのは、夜の八時過であつた。出雲寺橋を
 西へ渡つて、松竝木の路を下つて來ると、如意嶽のあたりに大文字
 の篝火がぱつと明るく見える。氣がついてみると、今日はお盆の精
 靈送りの日であつた。松が崎の妙法や、衣笠の左大文字は、もう夙く
 に消えてしまつたかして、振り向いて見ても、それらしい火影は眼
 に入らなかつた。

私は夜露のしめつた草の上へ、どつかと腰をおろした。西賀茂邊
 の荷車も、もうすつかり歸り切つて、松畷には車の音一つ聞えない。
 あたりはひつそりとして、時たま思ひ出したやうに馬追が鳴いて
 ある。

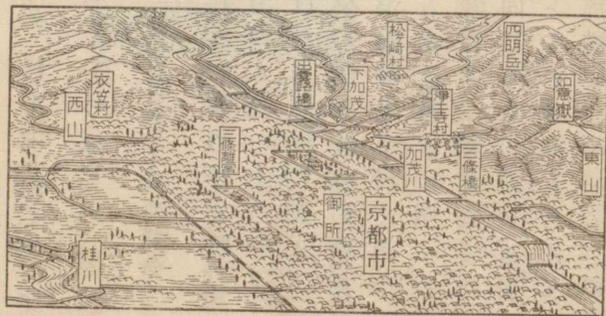
篝火は一しきり燃え盛つた後と見えて、段段と消え細つてゆく。

下賀茂
 京都府愛宕郡。
 如意嶽
 比叡山の支峯。
 京都市の東方に
 あり。一に大文
 字山といふ。
 松が崎
 下賀茂の北半
 里。
 衣笠
 京都府葛野郡衣
 笠山。

が手に取るやうに見られる。山のすぐ麓にあたる小さな淨土寺村では、今夜の送火に朋輩の誰彼と火入れを競り合つた村の若い衆は、どんな氣持であの火の衰を眺めてゐることだらうか。あれだけの篝火を焚くには、相應の準備とかなりの入費とが在る事と聞いてゐる。がそんなものよりも、今日を晴の意氣込といつたら随分と大層なものであつたに相違ない。ところで、それももう今はあのやうに段段と消え細つてゆく。若い衆のなかには、たまには村境の柳の蔭に立つて、ぢつと火の衰に見惚れてゐるものもあらうがその鉛のやうな心は、もうすつかり篝火のことなどは忘れてしまつて、折柄の混雜を幸ひに、手當りまかせに猿のやうな惡戯をしてゐるのが多からう。

世のなかにはよくさういふ手あひがある。世間を渡つてゆく上にも、技藝を修めてゆく上にも、最初は非常の意氣込で、吾と吾が内部に盛に火を附けて煽り立てる。さうかと思ふと、急に執著が無くなつて、いつの間にかもう外方を向いて、さうしたこともあつたかといつたやうな顔をして、つんと取り濟ましてゐる。つまりかうした内部の様を、それと自覺せず、過ぎてゆく。――そこにひ弱な人間の心の永久の悲劇がある。

火はうとうとと眠るやうに消えかかつて、大文字の要らしい點に、唯一つほつちりと残つたのが暫くはきらきらと輝いてゐたが、それもやがて吹き消すやうに、ふつと無くなつてしまつた。どんよりと雨曇のした空合は、何か怖しい獸の眼付でも視るやうな不安な影をたたへて、ぢつと私の頭の上に押し被さ



薄田泣菫
詩人。名は淳介。
岡山縣の人。明
治十年五月生ま
る。

つて来る。
静かなしつとりとした大氣を通して、一しきり市街のどよめき
が、わつといつたやうに響いて、ぼつたりと消えてしまった。
私は腰を起して、とぼとぼとまた松原を下つて往つた。

(薄田泣菫—猫の微笑)

暮煙近く島根を包みて、水の色心ゆくばかり美しき家の子を呼び
寄せて船装ひせさず。櫓拍子静かにやがて漕ぎ出づる波の上の心、又
なべてならず。煙波縹渺として、近きは黒く遠きは白く、漁村の燈火二
つ三つ松の樹の間にきらめけるあたり、炊煙一朵の雲を吐きて、稍見
え初むる星屑のそれも亦よし。船は揺搖として浪を分けて行く。思ひ
ぞ出づる過ぎし年、われ清見瀨に船を浮べて、山と水と月とに明くる
を忘れたる事もありけるが、歲月流るるが如し。我にあひ馴れたるか
の老漁夫はた何となりけん。東西幾十里、この星同じくその家をも照
らせどもと思へどもかひなし。我が東へ歸らんとするを涙を含んで
停車場に送り、汽車既に發するになほ去らず、且那樣よ、まめでござれ
よう」と、その聲今あるが如し。櫓聲俄に聞くに堪へず。急に船を漕ぎ戻
させて宿に歸る。(川上眉山)

一一 百蟲譜

蝶の花に飛びかひたるやさしきものの限なるべし。それも啼く
音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこ
そ莊周が夢も、この物には託しけめ。



蛙は古今
也の序に書か
れてより、歌
畫よみの部に
畫思はれたる

莊周が夢
莊子に、「昔者莊
周夢爲胡蝶。栩栩
然然。胡蝶也。俄
然覺。則蘧蘧
然周也。」
古今の序に
古今集の序に、
「花になく鶯、水
にすむ蛙の聲を
きけば、生きと
し生けるものい
づれか歌をよま
ざりける。」
麥秋や風には
告す白の音
蘿菔
翁の云云
松尾芭蕉の句
に、「古池や蛙と
びこむ水の音」。
翁は芭蕉の尊
稱。

こそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛ん
で翁の目覺ましければ、このものこと更にも誇り難し。
蟬はただ五月晴に聞き初めたるがよきなり。やや日ざかりに鳴

やがて死ぬ云
末句は、「蟬の聲。」

貧の學者云云
晉の車胤の故事。晉書車胤傳に「胤字武子、幼恭勤博覽、貧不常得油、夏月以練囊盛數十螢火、照書讀之。」

きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふことを聞かぬにこのものばかり、初蟬といはるるこそ大きな手柄なれ。やがて死ぬけしきは見えず」と、このものの上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇は只このものの爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者に取られて油火の代りにせられたるは、このもの本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは殊の外の不自由なり。俳諧にはその真似すべからず。
日ぐらしは多きもやかましくならず。暑さは晝のこずるに過ぎて、夕べは草に露おくころ鳴くなり。つくつくぼふしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死にて、このものになりたりと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲にさけぶにも劣るべからず。

退隱の蝶

金樓子に「楚國龔舍、初隨楚王朝、宿未央宮、見蜘蛛大如栗、四面築羅網、有蟲觸之而死、舍乃歎曰、吾生亦如此耳、仕宦者人之羅網也、豈可淹沒於於是乎、冠而退、時人謂之爲蜘蛛之隱。」
源滿仲の子。圓融天皇以下五朝に歷仕し、勇武當時に冠たり。治安元年卒す。(一六八一年)

らず。

蜘蛛はたくみに網を結んで、ひそまつて物を害せんとす。もろこの昔には退隱の蝶ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていと憎し。古代朝敵の初として頼光をさへ脅したるいとおそろし。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるは、聊かあはれ添ふる折もあらんか。彼はかひがひしく巢つくりてこそあれ、東海道に散りぼひたる宿なし者をば、くもとはいかでいふやらん。
蠶の生涯は世の爲に終り、火取蟲は誰が爲に身を焦すか。蜉蝣ははかなきために引かれ、蓼くふ蟲は不物ずきの謗となれり。
おなじ寶の名に呼ばれて、玉蟲はやさしく、こがね蟲はいやし。
蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安きことを得ん。さるも、たより悪しきかたに穴を營みて、千丈の堤を崩

槐安の都

異聞集に「淳子
 琴、醉夢入大
 槐安國、見王、
 王曰、吾南柯郡、
 居凡廿載、使者
 送出、穴、遂寤、
 尋、古槐下蟻穴、
 洞然朗朗、乃槐
 安國、又一穴直
 上、南枝、即南柯
 郡也」。

千丈の堤云云
 韓非子に「千丈
 之堤、以三蟻蟻之
 穴潰」。

蠅は云云
 歐陽修に、「憎
 蒼蠅賦」あり。
 紙魚は云云
 長嘯子に、「憐
 紙魚詞」あり。

原、吉原
 静岡縣駿東郡
 原。同縣富士郡
 吉原。

すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。
 狗の齒に噛まるる蚤はたまたまにして、猿の手に探らるる虱は
 逃るること難かるべし。

蝸牛は只水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらん。家持ちた
 れども行く先を負ひ歩くは、水雲の安きにも似ず。

蛇、蚯蚓の足なくとも歩むべくば、蜈蚣をさ蟲の數おほきは不用
 なり。

蟻螂の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の
 上にもこのたぐひはあるべし。

蟹の歩に譬ふべきものこそなければ、ただ、原、吉原を駕籠に乗りて、
 富士を眺めゆく人には似たり。

促織、鈴蟲、轡蟲はその音の似たるを以て名に呼べり。松蟲のその

つづりさせと

古今集、在原棟
 梁「秋風に、
 わらし藤袴、
 りさせ、つづり
 ざりすなく」。

われからと
 古今集、藤原直
 子「あまの知る
 藻にすむ蟲の、わ
 れからと音をこ
 そな、かめ世をば
 怨みじ」。

七賢
 晉の荀康、阮籍、
 山濤、向秀、劉
 伶、阮咸、王戎
 等、竹林の遊を
 なす。

横井也有
 名は時般、通稱
 孫左衛門。尾張
 侯の重臣。俳道
 に遊び半掃庵と
 號す。天明三年
 六月歿す。(二三
 六二年—二四四
 三年)

木にも寄らぬに、いかでかく名を附けたるならん。毛生ひむくつけ
 き蟲にもおなじ名ありて、松を枯らし、人に疎まる。一在處に二人の
 八兵衛ありて、一人は後生をねがひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲
 のたぐひなるべし。

蟋蟀のつづりさせとは、人の爲に夜寒を教ふるなり。藻に住む蟲に
 は、われからと、只身の上を歎くらんを、蓑蟲のちちよと呼ぶは、いと
 優しげなり。されど、父のみ戀ひて、などてか母を慕はざるならん。

蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕べは、
 じめてほのかに聞きたる、または長月の頃、力なく残りたる、寂しき
 かたもあり、蚊帳つりたる家のさま、蚊やり焼く里の煙など、かつは
 風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜ばな
 しには、いかに團扇の隙なかりけん。(横井也有—雜衣)

エビグラム
Epigram
警句。

一二 俚諺論

羅馬の一詩人がエビグラムを蜜蜂に譬へて、螫あり、蜜あり、軀は小さしといひけるは、すべての俚諺にとはいひがたきも、その最も巧妙なるものには恰當の語なるべし。俚諺の上乗なるものは、多くはこの三者を具ふ言短くして意義味ふべく、寸鐵人を刺すの妙あり。

人口に膾炙し易からんことを求むる故に、俚諺はおのづから律語を爲す傾あり。我が國語にては、五又は七が、自らなる律呂なれば、我が國の俚諺には、この律に従へるもの甚だ多し。雉子も鳴かずば撃たれまい、心の鬼が身を責めるといふ如く、最もよく人口に膾炙せるものにして、七五の調子をなせるはいと多し。人と屏風はすぐには立たぬ、思ふ念力岩でも徹す、身を捨ててこそ浮む瀬もあれな

どは、七七の調子をなして、語呂頗るよし、十で神童、十五で才子、二十過ぎてはただの人といふも、その語に律あり。右と同じ理由により、同語または同音を重ねたる類のものも多し。例へば、多勢に無勢、短氣は損氣、弱目に崇目、處かはれば品かはる、藥九層倍、勝つて兜の緒



をしめよといふが如し。かく律を成し、大尾韻又は頭音を合はすこと、詩の句法西に似たる所あるのみならず、俚諺に抽象の語少く、多くは具體的にいひなして、感動の強からん事を求め、又これが

爲に屢誇張の言を喜ぶなども、その詩歌に似たる點なり。この故に、諺にて物の度量をいふには、その數又は量を定めていふを好む。七たび搜して人を疑へ、人の噂も七十五日、預り物は半分の主などの類は、數ふるに違あらず數の中にて最も好んで用ゐらるるは三

Paradox
逆語。
パラドックス

の數なるべし。三度目が定の目、三年たてば三つになる。『懺悔話をすれば三年の罪が滅びる』三人よれば文殊の智慧、三人よれば人中、朝起は三文の徳、その他なほ多かるべし。又用心は臆病にせよ、黒犬にくはれて灰の和滓たがにおそれるなどは、誇張していふによりてその意味を成せるものの例なるべし。

誇張を喜ぶと同じ理由を以て、俚諺は一見實しやかならぬ語句、即ちパラドックスを用ゐるを喜ぶ。この種の諺に深く味ふべきもの少からず。急がばまはれ、言はぬは言ふに勝る、逢ふは別れのはじめ、兄弟は他人の始まり、論語讀の論語知らず、人を使ふは使はれるなど、その例なるべし。かく相反するが如き事柄の中に、却つて相通する所あるを發見するは、深邃なる智慧の一特徴なり。

パラドックスといふにはあらずとも、總じて反對のものを相並ぶるは、吾人の注意を捕ふる一方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。

『骨折損の草臥儲、聞いて極樂見て地獄、問ふは一旦の恥、問はぬは一生の恥』、長者の萬燈より貧者の一燈など、その例なり。

反對を並ぶるのみならず、總じて工種の事柄を相並べてそれを比照するは、俚諺の一大特色なり。これ俚諺の比喻に富める所以にして、その比喻の極めて妙なる、詩人の作としても恥しからぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは、多くこの類にあり。今思ひ出づるに隨うて、その三四の例を掲げんか。馬には乗りて見よ、人には添うて見よ、旅は道づれ世はなさけといふ如きは、幾たび唱するもその趣味の津津たるを覺ゆ。花は櫻木、人は武士、これ我が國民の、以てそれが理想を誇るに足るものの一なるべし。佛法と藁屋の雨は出でて聞け、風流の心に富める國民ならで、誰かこれをえいひ出でん。これを口ずさみ見よ。如何に、詩心、道心、宗教心の相結びなせる高雅幽玄なる妙趣の浮び來らん。

かく二つの事を並べ出でて相比照することなく、唯普通の暗喩を用ゐたるものも頗る多し。例へば、商賣は牛の涎、祕事は睫といふが如し。而して更にその喩のみを掲げて、他の意味を匂はせたるものも、その數多かるべし。蟹は甲に似せて穴を掘る、「目糞鼻糞を嗤ふ」といふ如きは、この例なり。

かく、比喩の用ゐる方は數種あれど、そのこれを用ゐるは寓言に於ける用ゐる方とは同じからず、目糞鼻糞を嗤ふといふ如きは、多少寓言に近寄れるところあるが如く思はるれど、俚諺と寓言とは、後者は敘事(物語)の體裁を具へ、前者は然らざる點に於いて、全く相異なり。同じく意を寓して比喩を用ゐるも、寓言はこれを出來事、又は動作として語り、俚諺は時間に結ばずして、唯常恆の事實として語るなり。(大西祝一 大西博士全集)

大西祝一
哲學者。文學博士。岡山市の人。操山と號す。明治三十三年十一月歿す。(二五二五年—二五六〇年)

一三四 川柳點

川柳點は實に剃刀の如きか、觸るるもの皆斷れ、近づくもの皆傷つく。語句簡勁にして、直に人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、滑稽頤を解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に、或は奇怪に、千變萬化、人をして應接に違あらざらしむ。時に輕薄なる鄙俚なる調なきにしもあらねど、要するに寸にして珍なるものなり。いで、左にその二三を舉げていひ試みん。

あがるなといはぬばかりの帳を出し。
無筆者年賀に來て御慶帳の記名に困り、さらば來ぬ分にして下されといひしこと、昔の笑話に見えたり。今は帳の代りに、名刺受を立關に出す。これもあがるなといはぬばかりなり。
竹の子は盗まれてから番がつき。

よくあることなり。後の祭にもあれ、何にもあれ、番を附くるは附けざるに勝れり。聞きやうによりては、諷刺ともなり訓誡ともなる。
おさへれば薄はなせばきりぎりす。

形容の妙を曲盡せり。蘇東坡が「餓蛟取、渴虎」と書きしを、いみじき手がらのやうに驚ける人も、しこの句を見れば、何とかいはん。

本降になつて出てゆく雨やどり。

道灌の「いそがずば濡れざらましを」の歌と一對の巧語。急ぎてもわるし、急がでもわるし。とにかく考物なり。

提燈が消えて座頭に手を引かれ。

その矛盾がをかききなり。塙檢校が「さてさて目あきは不自由な」といひしに似たり。

片假名に四角な文字は手を引かれ。

漢文に、捨假名、反點の、左右にうるさく附き纏へるさま、譬へ得て妙。

蘇東坡 宋の文豪。名は軾、洵の長子。眉山の人。英宗神宗哲宗に歴事し、翰林學士兼侍講に至る。(西曆一〇三六年—一一〇一年)
道灌の云云 太田道灌の歌に「いそがずば濡れざらましを」旅人のあとよりはるる野路の村雨。

昔のヲコト點ならんには、四角な文字に灸をする」ともいはばいふべし。

手紙には狸臺には鯉を載せ。

手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすらんをかしさよ。近來は、中等教育を終へたる者の文章にも、狐を馬に乗せたる類のこと多し。あながちにこの狸をのみ笑ひ難くや。

名物を食ふが無筆の旅日記。

腹のふくるる日記かな。食ふより外に能なき人間を罵倒し得て痛快。

泣く泣くもよい方を取る形見わけ。

人情の弱點を穿ち過ぎて、あまりに酷なる心地す。しかし事實なる



初代 柳川

小野九太夫
假名手本忠臣藏
に出づ。

戸隠
信州戸隠山なる
戸隠明神。手力
雄神を祀る。

能因
歌僧。俗名稱永
愷。攝津古曾部
に居り、世に古
曾部入道と稱
す。

袋草紙
四卷。藤原清輔
の著。歌學の書。

忠盛
平氏。清盛の父。
(一七五六年—
一八一三年)

隼太
頼政の郎等猪隼
太。

盛衰記
源平盛衰記な
り。四十八卷。

頼政
源氏。仲正の子。

をいかにせん。かの赤穂の城渡の際、お金配分に高割を唱へし小野九太夫は、この露骨なるものか。

かくの如く、川柳點は尋常茶飯の出來事を捉へて、よく滑稽化するのみならず、又最も眞面目なるべき故事、傳説、史實等を題目として、その縦横自在なる口吻を弄せり。

戸隠も神樂のあひだ髭をぬき。

岩戸の細目に開くまでは、用のなき戸隠明神なるを思ふべし。鑷に髭ぬくひま人の所作を、神代に附會したる、働あり。

御紀行拜見に能因は當惑し。

なまじひに名歌を詠みて、苦勞をまうけたるは能因なり。天日に焦して顔だけは黒めたれど、紀行までは手が届かずやありけん、物にその沙汰なし。作者のつけ目は此處なり。但、袋草紙に、一度においては實か。八十島の記を書けり」とあり。何時も室内旅行家にはあらざ

りけらし。

忠盛の高名の場を犬がなめ。

抱きとめたるは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階を飛び越して、高名の場を嘗めたりといへる滑稽突梯、まことに及び易からず。

その暗さ隼太櫻に衝きあたり。

盛衰記の、頼政鶴を射る條に、黒雲とは見たれども、天は實に暗しいづこを射るべしと矢所定かならずとあり。乃ち郎等隼太が左近の櫻に鼻衝き當ててまごまごする、一場の喜劇を案出し來れるなり。作者はいかなるへうきん者ぞ。

時致は鞭をかじつて息をつぎ。

兄祐成が急を救はんとて、途に百姓の駄馬を奪ひて大磯に驅けつくるは、曾我の物語中出色の快譚なり。これを圖にして、大根の鞭を

射を善くし、和歌に巧なり。晩年別髪し世に源三位入道と稱す。治承中以仁王を奉じて兵を擧げ、敗れて宇治平等院に自殺す。(一八四〇年)

時致
曾我五郎。河津祐泰の子。建久四年兄祐成と共に父の仇工藤経を斬る。(一八三四年—一八五三年)

祐成
曾我十郎。河津祐泰の長子。建久四年父の讐工藤経を斬り、終に仁田忠常に殺さる。(一八三二年—一八五三年)

大磯
神奈川縣中郡大磯

磯町。
佐野 源左衛門常世。
諸曲鉢の木に出づ。

戸塚の阪

神奈川縣鎌倉郡。

道風

小野氏。書家。三蹟の一。(一五五六年—一六三六年)

文王

周の武士の父。

太公望

呂尚といふ。文

王武王を輔け、

天下を一統せしむ。

金子元臣

歌人。國學者。

御歌所寄人。國

學院大學教授。

東京市の人。明治元年十二月生

まる。

添へたるは畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根を嚙らせたるは、この作者の氣轉なり。

佐野の馬戸塚の阪で二度ころび。

戸塚の阪は鎌倉入の一難處。元來乘力なき源左が瘦馬、さぞや越えなづみしならん。さるを二度まで轉びたりと誇張したるに、大いなる可笑味を生ず。

芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり。

湊合の妙を見る。主題の蛙をいはで、突然に仕立てたるところに一種の面白味あるなり。

釣れますかななどと文王そばに寄り。

流石の聖人文王と、奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには極めて平凡ならざるを得ず。ただ「など」との語、胸に一物ある趣を狀し來たりて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。(金子元臣)

一四 青年の使命

謹啓、時下益御清壯慶賀この事に候。陳ぶれば、先般友人より御近況竝に青年團に關し御盡瘁の模様承はり及び候。なほこの上とも一層の御盡力希望の至に候。申すまでも無く候へども、



山 縣 有 朋

今次の歐洲大亂の後は、全世界に互り、精神上、物質上非常なる變化を來たし、わが帝國に於いても、直接間接にその影響を被るべきは明白のことに候。就いては、將來帝國を擔ひて

立つべき青年には、確乎たる決心と覺悟とを要すべく、今日より豫め指導鍛鍊する必要あるは、今更多言を要すまじく候。今次大戦の原因は種種あるべく候へども、要するに各民族の競

争の結果に外ならず。而してこの大戦が中歐の天地に於いて解決を告ぐると否とに拘らず、次に起るべき競争は必ず東亞の地を中心と致すべく、即ちその競争は政治上、經濟上、種種の形式を以て現はれ、遂には勢の赴く所、國難を醸成するに至ることなきを保し難きものと覺悟せざるべからざる儀と存じ候。幸に今次の大戦に當りては、帝國は遠く交戦の地域を離れ、直接の害毒を被ること少しと雖も、戦後の競争に關しては、直接に波瀾を被り、この間もし一步を誤らば、邦家千載の悔と相成るべく、實に容易ならざる時期と相考へられ候。近世わが國の列強と交渉を有するに至りたる以來、五六十年間の事を追懷するに、非常なる難關に遭遇せしこと一再ならず候。今日よりこれを想ふだに、なほ心膽の寒きを覺ゆる事あり。この間に處し、幸に難局を披き、國運の伸張を見たるは殆ど

天祐とも申すべく、上千古の聖帝を仰ぎ、下忠誠の國民あり、幾多の賢宰良將、籌謀宜しきを得、相俟ちてここに至りたるは勿論ながら、又當時帝國は列強の間に伍し、その地位必しも今日の如く重要ならざりしに因るべく候。然るに今日にては、帝國は列強と伍を同じくするに至りたるのみならず、今後列強が東亞の天地に覇を争ふに當りては、帝國は彼等の爲に重大なる競争者にして、又當路の大障碍なれば、事に當りて困難を感ずる度も、昔日に比し幾層倍するは明かなるべく候。喬木風に當るの喩の如く、帝國の地位は、戦後に起るべき大颶風の衝に當る高樓とも申すべく、基礎棟梁は勿論、戸障子の末に至るまで、寸分の弛みなきにあらずば、よくこの大風を凌ぎて全きを保つこと能はざるべく、これを思へば、日夜枕枕憂に堪へざる次第に候。この來たるべき強風怒濤の

日に、帝國の運命を託するものは實に青年に外ならず候。御承知の如く、今日に於いては、國運の進展は國民を擧げ國力を盡し、所謂上下一統舉國一致の力に倚らざるべからず、精神上物質上各種の方面に對して、青年の努力は益重要に候。この意義に於いて、老生は各地に青年團等の設置せられ、修養に從ふを喜ぶと共に、又益改善進歩して、眞に國家に資せんことを希ふものに候。貴下恰もこの時勢に際し、熱心指導誘掖の事に當らるるを聞き、欣喜の情に堪へず、偏に成果を擧げられん事を希望致し候。これ實に老生が帝國の前途の爲に己み難き宿願に候。老生齡既に八十を超え、今後帝國の爲に盡す餘命幾何もなく、只將來ある青年に帝國の前途を依頼するのみにて候。老生の眞意御推察下されたく候。早早敬具。(山縣有朋)

山縣有朋
公爵。元帥、陸軍大將。大正十一年二月薨す。(二四九八年―二五八二年)

名取川

宮城縣宮城郡。古來の歌名所なり。

仙臺

今の仙臺市。當時伊達侯の城下。

宮城野

今宮城郡原町の生菓原にその名残る。

馬酔木



玉田横野

宮城郡原町小田原の麓の地の舊名といふ。つつじが岡。仙臺市街の東偏にあり。

一五 奥の細道

名取川を渡りて仙臺に入る。菖蒲葺く日なり。旅宿を求めて四五日逗留す。ここに畫工加右衛門といふものあり、聊か心あるもの^{風流人}と聞きて知る人になる。この者、年頃さだかならぬ名所を考へ置き侍ればとて、一日案内す。宮城野の萩茂りあひて、秋の氣色思ひやらる。玉田横野、つつじが岡は馬酔木咲く頃なり。日影ももらぬ松の林に入りて、此處を木の下といふとぞ。昔もかく露深ければこそ、みさぶらひみかさとは詠みたれ。藥師堂、天神の御社など拜みて、その日は暮れぬ。なほ松島鹽竈の處處繪にかきて贈り、かつ紺の染緒つけたる草鞋二足、餞けせらる。さればこそ、風流のしれ者、ここに至りてその實をあらはす。^{本まの草鞋}
あやめぐさ足に結ばむ草鞋の緒。

みさぶらひ云
 古今集東歌「み
 さぶらひみ笠と
 申せ宮城野の木
 の下露は雨にま
 されり。」
 藥師堂、天神
 の御社
 共に躑躅が岡に
 あり。躑躅が岡に
 壺の碑
 多賀城碑を隠れ
 るなり。

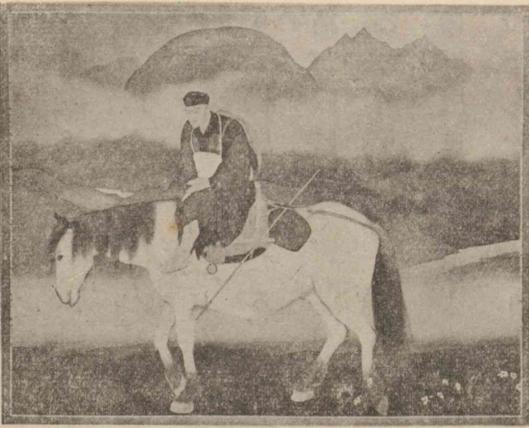
野田の玉川、沖
 の石
 共に宮城郡。
 末の松山
 宮城郡多賀城村
 大字八幡の砂丘
 ないふか。

かの繪圖にまかせてたどり行けば、奥の細道の山際に十符の菅あり。今も年年十符の菅菰を調べて國守に獻ずといへり。
 壺の碑は市川村多賀城にあり。高さ六尺餘、横三尺ばかりか。苔を穿ち文字幽かなり。四維國界の里數をしるす。この城は、神龜元年按察使鎮守府將軍大野朝臣東人之所置也。天平寶字六年參議東海東山節度使鎮守府將軍惠美朝臣朝鶴修造也。十二月朔日とあり。聖武天皇の御時に當れり。昔より詠み置ける歌枕多く語り傳ふといへども、山崩れ川落ちて道改まり、石は埋もれて土にかくれ、木は老いて若木にかはれば、時移り代變じてその迹たしかならぬ事のみなるを、ここに至つて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閱す、行脚の一徳、存命の悦、羈旅の勞をわすれて涙も落つるばかりなり。
 それより野田の玉川、沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造りて末松山といふ。松の間間みな墓原にて、翼をかはし枝を連ぬる契の末も、

綱手かなしも
 古今集東歌「陸
 奥はいづくはあ
 れど鹽竈の浦こ
 ぐ船のつな手か
 なしも。」

鹽竈の明神
 陸前國鹽竈町に
 あり。
 國守再興
 元祿二年伊達綱
 村造督。
 和泉三郎
 藤原忠衡。秀衡
 の第三子。泰衡
 等父の遺命に背
 きて源義經を討
 たんとす。忠衡
 獨聽かず、血戰
 して死す。(一一)

終はかくの如しと悲しさもまさりて、鹽竈の浦に入相の鐘をきく。五月雨の空聊か晴れて、夕月夜幽かに、籬が島も程近し。蟹の小舟漕ぎつれて、肴わかつ聲聲に、綱手かなしもと詠みけん心も知られていとど哀なり。その夜、盲法師の琵琶を鳴らして奥淨瑠璃といふものを語る。平家にもあらず、舞にもあらず、鄙びたる調子うち上げて、枕近うかしましけれど、流石に邊土の遺風忘れざるものから、殊勝に覺えらる。
 早朝鹽竈の明神に詣づ。國守再興



(筆浦九田野) 蕪芭の旅

せられて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階九切に重なり、朝日朱の玉垣を輝かす。かかる道のはて塵土の境まで、神靈あらたに

八四九年

藤中將されか
たのつかはみ
ちより一里ば
かり笠島とい
ふ處にありと
いへどさみだ
れ降つてきて
みちもいとあ
しければわり
なくみ過して
となりぬ
はせを
かさしまやい
づこ五月のわ
かり道

洞庭

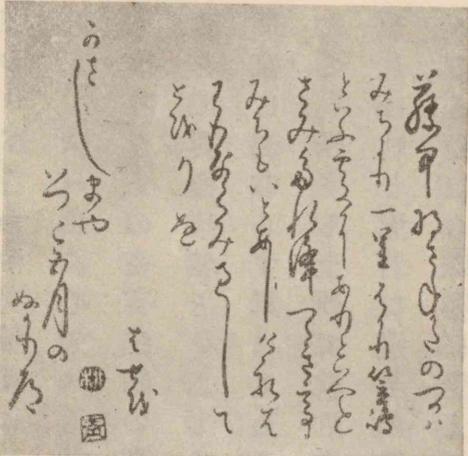
支那第一の大湖。湖南省の北部にあり。

西湖

支那浙江省杭州府城西にあり。

浙江

支那浙江省杭州府にあり。

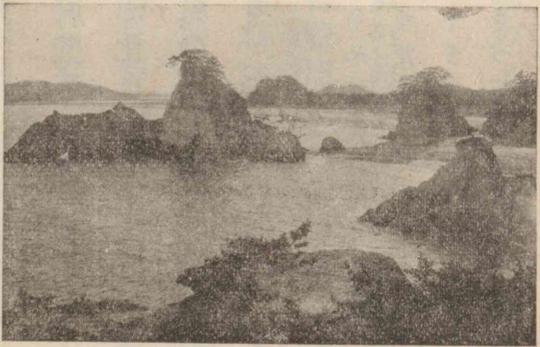


松尾芭蕉筆

ましますこそわが國の風俗なれと、いと尊し。神前に古き寶燈あり。かねの戸びらの面に、「文治三年和泉三郎寄進」とあり。五百年來の倂いま眼の前に浮びて、そぞろに珍しかれば、勇義忠孝の士なり。佳名今に至りて慕はずといふ者なし。誠に人はよく道を勤め義を守るべし。松名も亦これに従ふ。日既に午に近し。船を僦りて松島にわたる。その間二里餘、雄島が磯につく。抑もこと舊りにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭、西湖をはぶかしむ。東南より海を入れ、天を指し、臥すものは波に匍匐し、あるは二重に重なり、三重に疊み

て、左にわかれ右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉汐風にたわみ、屈曲おのづから矯めたるが如し。その氣色、窅然として美人の顔を粧ふ。ちはやぶる神代の昔、大山づみのなせる業にや。造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ詞を盡さん。

雄島が磯は地つづきて海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の迹、坐禪石などあり。また松の樹蔭に、世を厭ふ人なるべし。落穂、松笠などうち煙りたる草の庵靜に住みなせり。いかなる人とは知られずながら、まづ懐かしくて立ち寄るほどに、月海に映りて、晝のながめ又あらたまりぬ。江上に歸りて宿を求むれば、窓をひらき二階を作りて、風雲の



松島

雲居禪師
元和の頃の名僧。

曾良
信濃の人。河合

眞壁平四郎
法名を法身といふ。
見佛聖
天仁の頃の僧。
雄島に住す。
松尾芭蕉
俳人。正風の祖。
名は宗房、通稱忠左衛門、桃青と號す。伊賀上野の人。江戸深川に住む。北村季吟に學び、西行の風を慕ふ。
元祿七年十月大阪に歿す。(二二〇三年—二三五四年)

氏、通稱惣五郎、芭蕉の門人。寶永七年五月歿す。(二三〇九年—二三七〇年)

瑞巖寺

松島村にあり。

眞壁平四郎

法名を法身といふ。

見佛聖

天仁の頃の僧。

雄島に住す。

松尾芭蕉

俳人。正風の祖。

名は宗房、通稱忠左衛門、桃青と號す。伊賀上野の人。江戸深川に住む。北村季吟に學び、西行の風を慕ふ。

元祿七年十月大阪に歿す。(二二〇三年—二三五四年)

中に旅寝するこそ怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほととぎす。 曾 良

余は口を閉ぢて、眠らんとするにいねられず。

十一日瑞巖寺に詣づ。當寺三十二世の昔眞壁平四郎出家して入唐、歸朝ののち開山す。その後、雲居禪師の徳化に依りて、七堂藁あらたまりて、金碧の莊嚴光を耀かし、佛土成就の大伽藍とはなれりけり。かの見佛聖の寺はいづくにかと慕はる。 (松尾芭蕉—奥の細道)

今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚只かりそめに思ひ立ちて、吳天に白髮の恨を重ぬといへども、耳に觸れていまだ目に見ぬ境若し生きて歸らばと定めなき頼の末を懸け、その日やうやう草加といふ宿にたどり著きにけり。瘦骨の肩に懸かれる物まづ苦しむ。只身すがらにと出で立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴衣、雨具、墨筆のたぐひ、或はさりたき錢などしたるは、流石にうち捨てがたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。 (松尾芭蕉)

一六 七寶の柱

山吹、躑躅が盛だのに、その日の寒さには、車の上で幾度も外套の袖をひしひしと引き合はせた。

「夏草やつは者どもが夢のあと」といふ芭蕉の碑が古塚の上に立つて、そのうしろに藤原氏三代榮華の時、



泉龍頭の船を泛べ、管絃の袖を翻し、みめよ鏡き女達が紅の袴で渡った朱欄干、瑤瑤橋花のなごりだといふ、蒼蒼と淀んだ水の中に、馬の首ばかり浮いたやうな青黒く古

び朽ちた杭が唯一つ太く、頭を出して、そのまはりに何の魚の影もなしに、幽かな波がよる、薄暗い大池がある。

毛越寺の、本堂脇の事務所といつた處に、小机を圍んで、僧とは見

藤原氏三代
清衡—基衡—秀衡

毛越寺
岩手縣磐井郡平泉村。

えない、鼠だの茶だのの無地の袴を穿いた、閑らしいのが三人控へたのを見ると、その中に火鉢はないか、赫と火の氣の立つ……と、さう思つてさし覗いた程寒かつた。あとで聞くと、東京でも袷一枚では慄へる程だつたといふ。

伊達の大木戸
福島縣伊達郡大木戸村。
光堂
平泉にあり。藤原氏三代の墓廟なり。

汽車中、伊達の大木戸あたりは眞夜中のどしや降で、この様子では、思ひ立つた光堂の見物もどうなるだらうと、心細いまで氣遣はれた。

次第に麥も苗も色には出たが、菜種の花も雨に叩かれ、畑に畝にひよろひよると亂れて、女郎花の露を思はせるばかり、初夏はおろか、春の闌な景色とさへ思はれない。

ああ、雲が切れた、明るいと思ふ處は、

「沼だ。ああ大きな沼だ。」

と見ると、雨水が渺渺として田を浸すので、行く行く山の陰は陰慘

として暗い。處處巖碧く、ほつと薄紅く草が染まる。嬉しや日が當ると思へば、角ぐむ蘆にまじり生ひ茂る根笹を分けて、寂しく石楠花が咲くのであつた。

奥の道はいよいよ深きにつけて、空は彌がうへに曇つたけれども、志す平泉に著いた時は、幸に雨はなかつた。そのかはり車に寒い風が添つた。

さて毛越寺では、運慶の作と稱ふる仁王尊をはじめ、數ある國寶を巡覽せしめる。

「御參詣の方にな、お觸らせ申しは致さんのぢやが、御信心かに見受けまするで差支へませぬ。お手に取つて御覽なさい。ささ、

と腰袴で、細いしなひ竹の鞭を手にした案内者の老人が、硝子蓋を開けて、半ば繰り開いてある玉軸の經を一卷、手渡しして見せてくれた。それは紺地に清く盛り上つた一行金字、一行銀字の經である。

平泉
岩手縣西磐井郡平泉村。藤原氏の館址。
運慶
有名の佛師。康慶の子。備中法印と號す。

清衡朝臣
藤原清衡。陸奥
押領使。

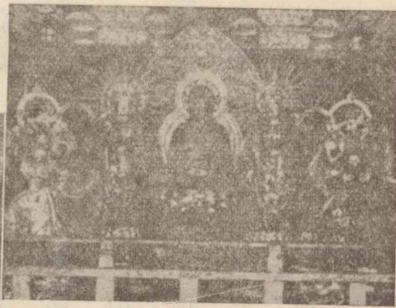
橋南谿
宮川氏、名は春
暉。伊勢の人。
京都に住み醫を
業とす。旅行を
好み、足迹海内
に徧し。文化二
年歿す。(一四
六五年)

俗に「銀線に觸る」などいふのは、かうした心持かも知れない。尊い文字は掌に一字づつ幽かに響いた。私は一拜した。
「清衡朝臣の奉供一切經のうちであります。時價で申しますと、な、唯この一卷でも一萬圓以上であります。」

と老人はいふ。橋南谿の東遊記に、
これは清衡存生の時、自在坊蓮光といへる僧に命じ、一切經書寫の事を司らしむ。三千日が間、能書の僧數百人を招請し、供養して書寫せしめしとなり。余もこの經を拜見せしに、その書體楷法正しく、行法亦精妙にして、
といふもの即ちこれである。
一寸—この寺のではない—或案内者に申すべき事がある。君が提げて持った鞭だが、遠くの掛軸を指し、高い處の佛體を示すのとは、かく、目前に近近と拜まるる觀音、勢至の金像を説明するとい

中尊寺
平泉村關山にあ
り。長治年中藤
原清衡の創立。

中尊寺光堂及及び寶物



つて、御目の前へ、今にも觸れさうにピシヤピシヤと竹の尖を振ふのは勿體ない。大慈大悲の佛達である。大して御立腹もあるまいけれども、作がいただけに瞬もし給ひさうで、さぞお鬱陶しからうと思ふ。

車は寂然とした夏草塚の傍に小さく見えて待つて居た。まだ葉ばかりの菖蒲、杜若が隈限に自然と伸びて、荒れたこの廣い境内は宛然沼の乾いたものに似て居た。別に門らしいものもない。
毛越寺から中尊寺へ行く道は、參詣の順をよくする爲に新に開いた道ださうで、傾いた茅の屋根にも、路傍の地藏尊に

五十六億七千万年ニシテ
釋迦入滅以後
勸

菩薩生ハシテ、同衆生の清度ニ佛ヲ六道ニ出現ス

金鷄山
平泉村高館の西
南。

夏明、花痕

北上川

陸中の北境山中
に發し、盛岡市
を過ぎ宮城縣に
入り海に注ぐ。

衣川

膽澤郡の西境よ
り發し、平泉の
北邊に至りて北
上川に入る。

高館の址
平泉村平泉驛の
北にあり。源義
經の自殺せし
處。

も、一一由緒のあるのを車夫に聞きながら、金鷄山の頂、柳の館址を左右に見つつ、車は三代の豪華の亡びた草の逕を靜に進む。樹立の森森としていささか物凄いなほどな阪道、岩膚を踏むやうで泥濘はしないがつるつると迂る。雨降の中では草鞋か靴でもないと上下はむづかしからう。其處を通り抜けて、北上川、衣川、名にしおふ高館の址を望む。山道二町ばかりで、中尊寺はもう近い。

大きな廣い本堂に見上げるやうな一體の釋尊のほか、寂寞として何も無い。それが莊嚴であつた。日の光が幽かに漏れた。はじめ藥師堂に詣でて、それから寶物庫を一巡すると、ここの番人のお小僧が鍵を手にして、一條道を隔てた丘の上に導く。階の前に八重櫻が枝もたわわに咲きつつ、且芝生に散つて敷いたやうであつた。

と、階の前の花片が折からの冷たい風にはらばらと誘はれて、さつと散つて、この光堂の中を空ざまにひらりと紫に舞ふかと思ふと、羽目に浮彫した孔雀の尾に玉を刻んで綠青に錆びたのが、なほ嚴かに美しいその翼をはらばらと敲いて、ちらちらと床に零れかかる。宙で黄金の卷柱の光を受けて、ぱつと金色に翻るのを見た時には、思はず驚歎の瞳を瞠つた。

床も承塵も、柱は固より、佇むものの踏む處は、黒漆の落ちた黄金である。黄金の剥げた黒漆とは思はれないで、しかも些のけばけばしい感じが起らぬ。さながら金粉の薄雲の中に立つた趣がある。その雲を透かして、四方に七寶莊嚴の卷柱に對するのである。美しき虹をそのまま柱にして描かれた十二光佛の微妙な種種相は、一つ一つ錦の絲に白露を鏤めた如き玲瓏たる珠玉の中にあらはれて、清く明かに、しかも幽かな幻である。その十二光佛の周圍には、玉螺

十二光
阿彌陀佛の光明
の徳用を十二種
に分ちて名づけ
たるもの。



寶相華

基衡

清衡の子。陸奥出羽の押領使。

秀衡

基衡の子。文治三年十月卒す。

(一一八四七年)

雛罌粟



鈿を星の流るるが如く輝かして、寶相華が透間もなく咲きめぐつて居る。

この柱が須彌壇の四隅にある。まことに天上の柱である。須彌壇は四座あつて、壇上には彌陀、中央觀音、右勢至の三尊、日天二天、大地六地藏が安置され、壇の中には真中に清衡、左に基衡、右に秀衡の棺が納まり、ここに各一口の劔を抱き、鎮守府將軍の印を帯び、錦袍に包まれた三つの屍が、まだそのままに横たはつて居るさうである。

雛罌粟の紅は美人の屍より開いたと聞く。光堂はここに三箇の謹んで辭して天界一叢の雲を下りた。

階を下りざまに見返ると、外圍の天井裏に蜘蛛の巢がかかつて、風に軽く吹かれながらきらきらと輝くのを、不思議なる塵よと見れば、一粒の金粉の落ちて輝くのであつた。

好
せ
面
ま
ま
ま

優闥王

釋迦在世當時の
儒賞彌國王。佛
像を作りし最初
の人。

淨名居士

維摩居士ともい
ふ。釋迦當時の
聖者。

さて經藏を見よ。又いやがうへに懐かしい。羽目には天女——伽陵頻迦が髣髴として舞ひつつ奏でつつ浮き出て居る。影をうけた束貫の材は鈴と草の花との玉の螺鈿である。

漆塗金の八角の臺座には、本尊文殊師利、朱の獅子に騎しておはします。獅子の眼は爛爛として、赫と眞赤な口を開けた。右にこの轡を取つて、一寸振り向いて菩薩に物をいひさうなのが優闥王、左に一匣を捧げたのは善財童子、この兩側左右の背後に淨名居士と佛陀波利とが、一は拂子を振り、一は錫杖に一軸を結んだのを肩にかつぐやうに突いて立つ。額も目も眉も、そのいづれもにこにことして、文殊も微笑んでまします。第一獅子が笑ふ。獅子が、

この須彌壇を左に一架を高く設けて、ここに紺紙金泥の一卷を半ば開いて捧げてある。見返しは金泥銀泥で本經の圖解を描く。清麗巧緻にして且神祕的で、恰も月光を仰ぐやうであつた。

架の裏に青白い瘦せた墨染の若い出家が一人居た。私の一禮に答へて、

「ごゆるり御覽なさい。」

二三の散佚はあらうが、いふまでもなく堂の内壁にめぐらした八つの棚に満ちて、二代基衡のこの一切經、初代清衡の金銀泥一行ませ書の一切經、竝に判官最眞の第一人者、三代秀衡老雄の奉納した黄紙宋板の一切經が、みな黒耀の珠玉の如く漆の架に満ちて居る。一切經の全部量は七駄片馬と稱ふるものである。

「拜見いたしました。」

「はい。」

と腰衣の素足で立つて、すつと經堂を出て、朴齒の高足駄で卷袖で、寒げに細りと草叢を行く。清らかな僧であつた。(泉鏡花―七寶の柱)

泉鏡花

小説家。名は鏡太郎。金澤の人。明治六年十一月生まる。尾崎紅葉の門人。

日光

栃木縣上都賀郡。

中禪寺

日光町より三里。

湖

中禪寺湖、一名を幸湖といふ。風光甚だ佳し。

男體山

日光山中の最高峯、一に黒髮山といふ。

湯元

中禪寺湖の西三里餘。温泉あり。

扶桑略記

三十卷。僧皇圓の著。神武天皇より堀河天皇に至る間の編年史。

一七 神 戰

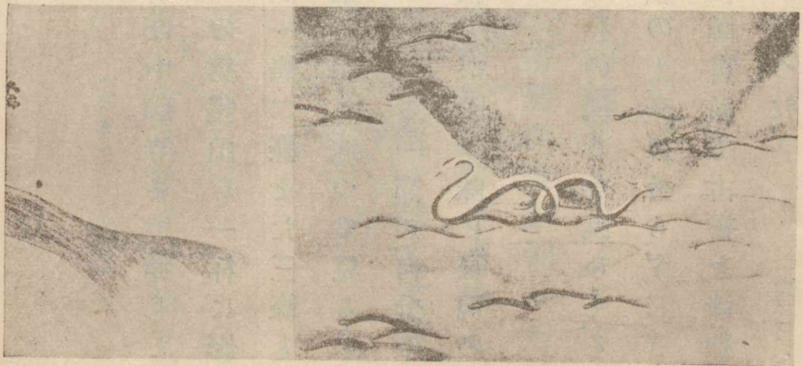
日光はちやうど紅葉の頃であつた。第一日は中禪寺まで伸して湖畔の宿に入つた。座敷からの湖面には、夕べの男體山が一杯に影を落して、秋風が渡ると、その上に銀の泥引が一條二條また三條と引かれた。床に入つて、明日の湯元への道を案内記に辿つて見ると、途中の戦場が原の處に、「昔神戰のあつた場所」とある一節が、自分の胸に不思議と強く響いて來た。だが、その神戰といふ意味には何の説明も無かつた。

明けてその戦場が原を抜け、湯元の温泉の秋の深さを眺めて、そのあくる日に又來た道を引き返した。この旅の土産は、分らずじまひに持ち歸つた神戰の二字であつた。その後圖書館で古書を涉獵して見ると、扶桑略記にその詳細な記載があつた。

庚申山
群馬縣山田郡

昔男體山に蛇身の女神が棲んでゐた。中禪寺湖を挟んでるか向の上州に對立してゐる庚申山の山の主は百足の神であつた。この二柱の神様は領地争で敵同士であつた。然し戦争となると、敗ける方はいつても男體山の女神であつた。やがては段段に領地を狭められて、自分の棲む土地も氣づかはれる状態にあることを虞れてゐたが、女神は或時雲中からの神の告を受けた。

雲中に示現があつて、陸奥に弓をよく射る獵夫がある。その救を得れば、今度の戦には、きつとお前の方が勝利である」と聞えたので、女神は喜んで、白鹿と化して陸奥を



訪ねた。あちこちと、これは獲物の方から獵夫を尋ねてゐると、ある森林でその人によつたりと出會つた。然し鹿がそこで人間に挨拶するのも變なものだが、傳説では、鹿が挨拶もしないで、一目散にもと來た方角へ逃げ出したとなつてゐる。白鹿を見つけた獵夫は何で見逃さう。何處までもと矢を番へて追つて往つた。鹿の逃脚が早いので、その矢を遂に放つ折が無くて、そのままとう下野の國まで追つて來てしまつた。白鹿は自分の繩張まで來ると、鹿の皮を脱いで女神の姿になつてしまつた。そして吃驚してゐる獵夫に近づいて、



「實は自分はこの邊を支配してゐる神であるが、かうした手段でお前を陸奥から誘つて來たのは、お前に頼みたい事があつただ。」

と庚申山の百足との事件を話して、今度の戦争の助太刀を頼み込んだ。獵夫は早速に引き受けてその時期を待つてゐた。

甘く見てゐる庚申山の主は、また蛇をいぢめて領地を奪つてやらうと、一族郎黨の百足を集めて男體山に攻め寄せて來た。

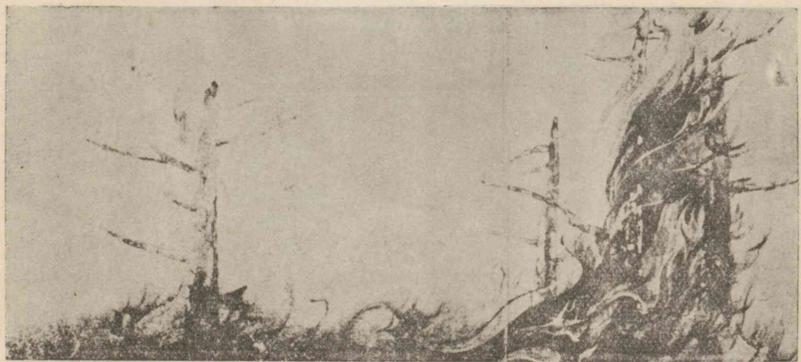
それと見た女神の方でも、一族の青大將、蝮、編蛇、山かがしなどを集めて、今度こそはと、神のお告の助勢を力頼みに、男體山の麓



の原に押し出した。

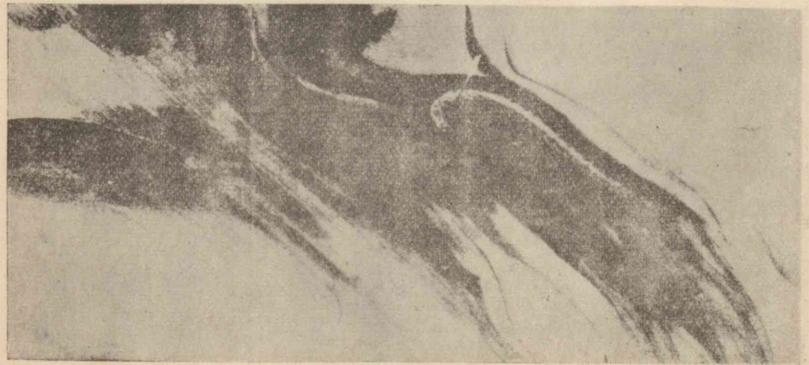
愈兩軍が接觸して、噛む、螫す、巻きつく、大修羅場が展開された。然し女神軍の方がやはり旗色が悪くて浮足立つた。その時鏑矢が一本高鳴して空を縫ふよと見ると、狙はあやまたず、庚申山の主の大百足の眼にぶつりと當つた。流石の百足も痛手に堪へず、一目散に庚申山をさして逃げ出した。大將傷つて軍全からずで、今度こそは蛇神の大勝利であつた。それ以來、二度と庚申山の手が伸びなかつたといふ。

そしてその戦のあつた場所が今の戦場が原であり、その時の血がたまつて今でも



赤い沼地が赤沼であり、獵夫が百足のあとを追つて、とうとう仕止めた迹に、記念に社を建てたのが今の宇都宮であるといふ。眞偽は元より私の關知せぬことで、只私は、かうした傳説に絡まる郷土の空氣に牽引の力を感じるのであつた。そして、次の展覽會への出品製作はこれと定めた。

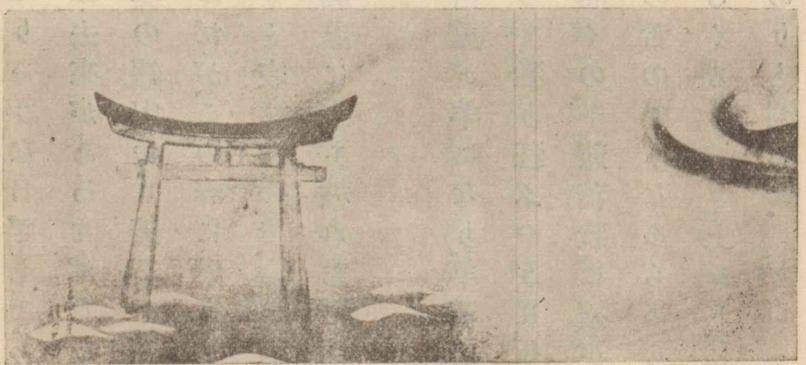
そこで餘暇さへあれば、次から次とその構想に耽つてゐたが、大體としては、傳説の段段を運んで描出することよりは、繪卷の形式をとる事が、伶俐な遣方であるとは、早くから定めて置いた事である。そして或説話の部分は容易に纏め得られたが、その戦



の場面、蛇と百足との取組合は流石に考に餘つてしまつた。この場合に擬人法をやれば割合に無事であるが、然し甲冑などの事に就いては何等の知識も無い私には、それも一つの難問題であつた。

しかも遂に考へ切れずに、犬も歩けば棒に當るの俚諺のやうに、それに又、去年の印象をもう一度色上することも、悪くは無いことと、愈製作にかかる前の月、戰場が原に野州躑躅が眞盛の頃に、湯元の奥まで歩いて見ることにした。

神戦の字義を知つてから、傳説と思ひくらべての旅の氣持は、おのづから去年と異



なつたものがあつた。その日は晩春の、雨になりさうな日ざしであつたが、戰場が原にかかる頃には、山近い雲の去來があわただしかつた。去年ここを通つた時分には、この原の奥の鑛山から鑛石を運搬する人馬の往來で、可なり賑つてゐたものだが、この春に索道が通じたとかで、その方への人の往來がはたりと寂れたので、廣い原中に、湯元へ目ざす自分の姿があるばかり、處處に立ち枯れた落葉松の大木の姿は一層寂しみを添へてゐる。

その行手にほつかりと白い煙が立つた。白兔が羊になり、羊が白牛となり、その白牛が十頭になり、百頭になつて、猛り狂ふやうに、折からの男體風が煽られて、流れる、舞ふ、渦を卷くの千態萬狀に擴がつてゆく。やがて草を舐める炎も見える。蛇の舌のやうなめらめらとした火、灌木を襲つては火龍のやうにくるくると捲き上る火。私の頭には、蛇と百足との鬭争の光景がありありと閃いた。

繪卷の順序は、卷頭に、まづ神蛇の悠悠として中禪寺湖に浮いて、男體山の投影が大きく畫面の全體を鎮めた場面、すべて戦前平和の氣持である。

第一段には、傳説中に於いての度度の敗戦の説明や、神の告を受けた發端の部分は全部省略してしまつて、直に陸奥に出かけた白鹿の歸路の奔放の狀ををさめた。但畫面には獵夫は見せず、鹿の振り返つた姿體にその氣分を持たせた。

第二段は、女神と獵夫との立つて交渉に入つた場面、鹿は既に女神の姿に戻つて、一本の老楓樹の下に、獵夫もよろしき位置に立つ。服装は神代。

第三段は、全卷の中心、蛇と百足との混戦の場面であるが、説明的にはその描寫を盡さねばならないが、私は此處を工夫して、戰場が原に見た野火の光景をかりて、戦禍を象徴することにした。それで、

全畫面に炎炎たる猛火を描くことにした。例の落葉松の枯木に纏はる炎も圖中に收めた。その火の全描寫面の内へ、放たれた矢の一條を、獵夫の助勢の意に描き入れた。

第四段には、暗雲迷迷とした中に、手負の大百足が眼に矢を立てたまま遁走する状を寫した。以上で傳説の主眼を通じての説明、又は自分の解釋としての順序は終るのであるが、卷末に卷首と同じ大きさの紙面に、騷がしかつた山湖の浪もをさまつて、水中に立つ男體の社の華表に夕虹が美しく懸かつた平和の終局を表出することにした。勿論華表その物が古代にあつたには違ないことだが、私はそれはその傳説時代のもではなく、その傳説が今に傳へられてゐるといふ現代への連鎖の役目に使つたのであつた。

題名は最初の印象のままに、「神戰の卷」と附けることにした。

(川端龍子——畫室の解放)

川端龍子
畫家。名は昇太郎。和歌山市の人。明治十八年六月生まる。初白馬會、太平洋畫會研究所等に學び、後歐米に遊ぶ。

一八 熊野落

大塔宮
護良親王をさす。當時鎌倉法親王と稱す。
般若寺
律宗。奈良市奈良阪の南にあリ。
虎の尾を履む
危険を冒すに喩ふ。易經、書經に出てたる語。

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞き召されむ爲に、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城すでに落ちて、主上囚れさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履むおそれ御身の上に薄りて、天地廣しと雖も御身を隠さるべき所なく、日月明かなりと雖も長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて、露に臥す鶉の床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻にイみて、人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、何處とても御心安かるべき所なかりければ、かくても暫しはと思し召されける所に、一乘院の候人按察法眼好專、いかにして聞きたりけむ、五百餘騎を率して未明に般若寺へぞ寄せたりける。折ふし宮に付き奉りたる人一人もなかりければ、一防防ぎて、落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、透間もなく兵既に寺内に打

河跡泉(皇子)言(按察)家
清華(もま)ま(ま)
一乘院
奈良にありき。

兩所權現
熊野本宮と新宮
とをさす。

華冠廿
腋下汗出
三蠟束著身
見更有天坐已座処
自不變木本座

A B C D
A B C B D
A B C B D
A B C

熊野三山
本宮新宮に、那
智を加へて稱
す。
十津河
奈良縣吉野郡。

給ひけるは、傳へ承はる、兩所權現はこれ伊弉諾、伊弉册の應作なり。わが君その苗裔として、いま朝日忽に浮雲のために隠されて冥闇たり。豈痛まざらむや。玄鑿空しきに似たり。神若し神たらば、君何ぞ君たらざらむと、五體を地に投げて、一心に誠を致してぞ祈り申させ給ひける。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらむと、神慮も暗にはかられたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御目睡ありける御夢に、鬢結ひたる童子一人來て、熊野三山の間は、なほも人の心不和にして、大義成りがたし。これより十津河の方へ御渡り候ひて、時の到らむを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附け參らせられて候へば、御道指南仕るべく候ふと申すと御覽ぜられ、御夢は即ち覺めにけり。これ權現の御告なりけりと、頼もしく思し召されければ、未明に御悅の奉幣をささげ、やがて十津河を尋ねてぞ分け入らせ給ひける。

山路もとより
云云
王維の詩に、「山路元無雨、空翠濕人衣。」
見上ぐれば云
遊仙窟に、「一向上、則有二青壁、萬尋、直下、則有二碧潭、千仞。」

その道の程三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峯の雲に枕を敲て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍び、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なくして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば、萬仞の青壁刀に削り、見おろせば千丈の碧潭、藍に染めり。數日の間かかる嶮難を経させ給へば、御身もくたびれ果てて、流るる汗水のごとし。御足は缺け損じて、草鞋皆血に染まれり。御伴の人人も、その身鐵石にあらざれば、皆飢ゑ疲れて、はかばかしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手をひきて、路の程十三日に十津河へぞ著かせ給ひける。(太平記)

悲しいかな、昨日は紫宸北極の高さに坐して、百司禮儀の装をつくらひしに、今は白屋東夷の卑しさに下らせ給ひて、萬卒守禦のさびしきに御心を惱まされ、時移り事去り、樂しみ盡きて悲しみ來る。天上の五衰、人間の一炊、ただ夢かとのみぞ覺えたる。(太平記)

一九 自然のあはれ

一、月と露

よろづの事は月見るにこそ慰むものなれ。ある人の月ばかり面白きものはあはれ」といひしに、又ひとり露こそあはれなれ」と争ひしこそをかしけれ。折に觸れば何かはあはれならざらむ。月花は更なり、風のみこそ、人に心はつくめれ。岩に碎けて清く流るる水のけしきこそ時をも分かずめでたけれ。沅湘日夜東に流れ去る、愁人のためにとどまることしばらくもせず」といへる詩を見しこそあはれなりしか。嵇康も「山澤に遊びて、魚鳥を見れば心樂しむ」といへり、人遠く水草清き所にさまよひありきたるばかり、心慰むることはあはれじ。(徒然草)

二、花と月

沅湘云云 唐の戴叔倫の詩に「盧橘花開風葉衰、出門何處望京師、沅湘日夜東流去、不爲愁人住少時。」
嵇康 西晉の人。字は叔夜。竹林七賢の隨一。(四曆二二三年—二六二年)

垂れ籠めて云

古今集、藤原因香「たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻もうつろひにけり」。



(繪挿語物國語好策) 阿 が 雙

花はさかりに月は限なきをのみ見るものは、雨にむかひて月を戀ひ垂れ籠めて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散り萎れたる庭などこそ見所おほけれ。歌の詞書にも「花見にまかれりけるに、早く散り過ぎにければ」とも、障る事ありてまからでなども書けるは「花を見て」といへるに劣れることかは、花の散り、月の傾くを慕ふならひはさる事なれど、殊にかたくななる人ぞ、この枝かの枝散りにけり。今は見所なしなどはいふめる。よろづの事も始終こそをかしけれ。望月の限なきを千里の外まで眺めたるよりも、曉

近くなりて待ち出でたるがいと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、打ちしぐれたる叢雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴、白樫などの濡れたるやうなる葉の上、さらめきたるこそ、身にしみて心あらむ友もがたと、都戀しう覺ゆれ。

すべて月花をばさのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。(徒然草)

三、秋の野ら

あやしの竹の編戸のうちより、いと若き男の、月影に色合さだかならねど、艶やかなる狩衣に、濃き指貫、いと故づきたるさまにて、ささやかなる童一人を具して、遙なる田の中の細路を、稻葉の露にそぼちつつ分け行くほど、笛をえならず吹きすさびたる、あはれと聞

平安朝のやうな感じ
の心

き知るべき人もあらじと思ふに、行かむ方知らまほしくて、見送りつつ行けば、笛を吹きやみて、山の際に惣門のあるうちに入りぬ。榻に立てたる車の見ゆるも、都よりは目とまる心ちして、下人に問へば、しかじかの宮のおはします頃にて、御佛事などさぶらふにや、といふ。御堂の方に法師ども参りたり。夜寒の風に誘はれくる空、だき物のにほひも、身にしむ心ちす。寢殿より御堂の廊にかよふ女房の追風用意など、人目なき山里ともいはず心づかひしたり。心のままに茂れる秋の野らは置きあまる露に埋もれて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどかなり。都の空よりは雲の往來もはやき心ちして、月の晴れ曇ること定めがたし。(徒然草)

四、四季

をりふしの移り變るこそ物毎にあはれなれ。物のあはれは秋こそまされと、人毎にいふめれど、それもさるものにて、今一きは心も

花里樓
寺里三井ま
祭り賀茂祭
山りひえい山

花橋は云云
古今集に「三月
まつ花橋の香を
かげば昔の人の
袖の香ぞする」
灌佛
四月八日。灌佛
會、又佛生會と
もいふ。



（筆琳光形尾） 圖の談

うち續きて、心あわただしく散り過ぎぬ。青葉になり行くまで、よる
づにただ心をのみぞ悩ます。
花橋は名にこそおへれ、なほ梅の匂にぞいにしへの事も立ち返
り戀しう思ひ出でらるる。山吹の清げに、藤のおぼつかなき様した
る。すべて思ひ捨て難きこと多し。

深く霞みわ
たりて、花も
やうやうけ
しきだつ程
こそあれ、を
りしも雨風

祭
賀茂祭。四月の
第二の酉の日に
行はる。
水鶏



夕顔



六月破
六月三十日。



（筆恭為泉冷）

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆ
く程こそ、世のあはれも人の戀しさもまされ
と人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五
月菖蒲茸く頃、早苗とる頃、水鶏の敲くなど、心
細からぬかは、六月の頃あやしき家に夕顔の
白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六
月祓またをかし。
棚機祭るこそなまめかしけれ、やうやう夜
寒になるほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づ
くほど、わさ田刈り干すなど、取り集めたるこ
とは秋のみぞ多かる。また野分のあしたこそ
をかしけれ、いひ續くれば、みな源氏物語、枕草
子などにこと舊りにたれど、おなじ事、また今

更にいはいにもあらず。おぼしき事はぬは腹ふくるる業なれば、筆に任せつつ、あぢきなきすさびにて、搔いやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯のけしきこそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとどまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人毎に急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の、寒けく澄める二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞあはれにやむごとなき。公事ども繁く、春のいそぎに取りかさねて催し行はるる様ぞいみじきや。追儼より四方拜に續くこそ面白けれ。晦の夜いたう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで人の門たたき走りありきて、何事にかあらむ、事事しくののしりて、足空にまどふが、曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ、年のなごり

御佛名

禁中の佛事。十

二月に行はる。

荷前

十二月に行は

る。十陵八墓に

幣帛を奉る。

追儼

十二月晦の夜行

はる。

四方拜

一月一日の午前

四時に行はる

も心細けれ。なき人のくる夜とて、魂祭る業は、この頃都にはなきを、あづまの方には尙することにてありしこそあはれなれ。

かくて、明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、引きかへ珍しき心ちぞする。大路のさま、松立て渡して、花やかに嬉しげなるこそ、又あはれなれ。(徒然草)

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し、類るもたゆみ、撓むもまた類る。雁がねの聲の砧を誘ふにやあらむ、砧の音の雁がねを誘ふにやあらむ。あなあやし、あなあやし、そもこの音の悲しきか、住む里のさびしきか、擣つ折の憂き故か。皆あらず、聞く人の心のわびしきなり。(清水漬臣)

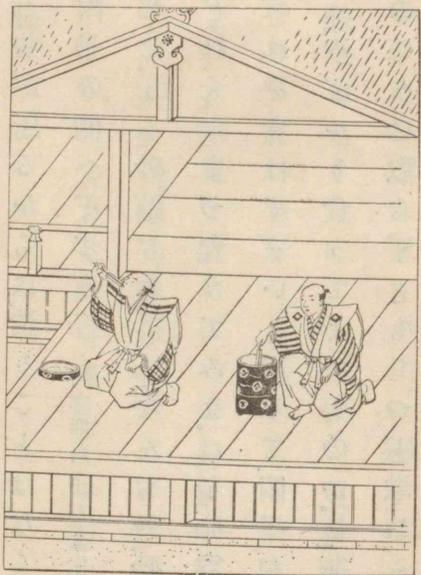
心の撓みばかり口惜しきものはあらず。よろづ學びの道もしかこそはあれ。初學びの程は、いかでと思ふ心のすみより、宵曉に勉め勵みて、文机に對ひても、春の日を短う、秋の夜を長からぬやうにのみ覺ゆるを、聊か物の心知り得て後は、いつとなく怠りゆき、書をひらきては見るに物うく、筆をとりては書くに心勞れて、はてばては文机の上にならぬや。(中島廣足)

二〇 附子

大名「このあたりの大名でござる。今日はさる方へ参る。太郎冠者を呼び出だし、申し付ける事がある。太郎冠者あるか。太郎冠者はあ。大名「おたか。太郎お前に。大名念なう早かつた。次郎冠者も呼べ。太郎畏つてござる。次郎冠者召すわ。次郎冠者心得た。お前に。大名汝等呼び出だすは別のことでない。今日はさる方へ行く。兩人共に留守をせい。冠者二人畏つてござる。大名それに待て。二人はあ。大名やい、このあなたに、附子がある程に、さう心得。二人それならば、兩人共にお供致しませう。大名さうではない。このあなたに、附子というて毒がある。この方から吹く風にあたつてさへ滅却する程に、さう心得。二人畏つてござる。

太郎「やいやい、次郎冠者。今日のやうなお留守はあるまいぞ。次郎お

お、お、お、そなたが供に行けば身共が留守をする。身共が供に行けばそなたが留守をする。今日のやうないひ合はせた留守はあるまいぞ。そりやあ。太郎何事ぢや。次郎附子の方から風が来た。ここにて話



原 本 挿 繪

ではな。い。さあ、紐は解いたぞ。さて、蓋をあけうほどに扇げ。次郎心得た。太郎「さて、蓋をあけたぞ。身共はあの附子を見て来う。次郎一段とよからう。太郎「やいやい、見て来たわ。次郎「いかやうな物ぢや。太郎「何

ぢやば知らぬが、黒い物がどつみりとしてある。旨さうな物ぢやほ
 どに、身共は食うて見よう。次郎、やくたいもないことを、おけ。太郎、身
 共は、附子に領じられたか、食ひたうてならぬ。行て食うて來う。次郎
 「身共が居るからは、遣ることはならぬ。太郎、名残の袖を振りきりて、
 附子の側へぞ歩み行く。太郎、附子を食ふ。むむ。次郎、やい、太郎冠者、なんと
 した。太郎、砂糖ぢや。次郎、なんぢや。砂糖ぢや。太郎、なかなか。次郎、どれ
 どれ。太郎、まづ食うてみよ。次郎、心得た。むむ、まことに砂糖ぢや。太郎
 「これを食はずまいと思つて、附子ぢやの、毒ぢやのとおしやつた。次
 郎、汝ばかり食うてよいものか。太郎、それならば、ちと遣らう。次郎、そ
 のやうに取らずともちつと取れ。二人、さてさて旨いことかな。

太郎、ほほう、よい事召さつた。頼うだお方の、附子ぢやの、毒ぢやのと
 おしやつたに、皆おくやつたと、頼うだお方のお歸りなされたらば
 申し上ぐる。次郎、身共がおけというたに、開けた某がまつすぐに申

牧溪和尚
 名は法常。南宋
 の僧。畫に巧な
 り。

し上ぐる。太郎、やいやい、これはじやれ事ぢや。このいひわけは、あの
 掛物を破ればよい。次郎、心得た。さらりさらり。太郎、よい事召さつた。
 あれは頼うだお方の、牧溪和尚の墨繪の觀音で、御祕藏なされたも
 のを、あの様に召さつた。お歸りなされたら、きつと申し上ぐる。次郎
 「破れというたによつて破つた。身共が申し上ぐる。太郎、やいやい、こ
 れもじやれ事ぢや。次郎、さて、このいひわけどもは、何とするぞ。太郎
 「この大天目を破れば、いひわけが立つ。次郎、いかないかな。また迷惑
 をさせうで。太郎、身共も、手をかける。そちらを持って。次郎、心得た。太郎
 「ぐわらり。次郎、ちん。太郎、さて、お歸りなされたらば、泣いて居よ。次郎
 「泣けばよいか。

大名、只今罷り歸る。やいやい、もどつたぞ。二人、泣け泣け。大名、心許な
 いが、何事ぢや。太郎、次郎冠者申し上げ。次郎、わこれ、申し上げさしま
 せ。太郎、お留守を大事と存じて、次郎冠者と相撲を取りましてござ

れば、次郎冠者は手とりでござり、私が小股を取つてこかしますと、こけまいと存じて、掛物に取り付いたれば、あのやうになりました。大名、これはいかなこと。あれは身共が祕藏の観音を、あのやうにし居つた。次郎、かへしさに、天目の上へ投げられました。あのやうに微塵になりました。大名、これはいかなこと。おのれを何としたものであらうぞ。太郎、かやうに大事の御道具を損ひまして、生けては置かせられまいと存じて、附子を食べて死なうと存じて、下されたれども、まだ死にませぬ。大名、おのれ等、今のまに滅却せうぞ。太郎、一口食へどもまだ死なず。次郎、二口食へども死なれもせず。二人、三口四口。次郎、五口六口。二人、十口あまり皆になるまで食うたれども、死なれぬ命めでたさよ。なんぼう。大名、やい、そこなやつ。次郎、はあ。太郎、これは何としたものであらう。大名、まだおのれはそれに居る。二人、宥さつしやれ、宥さつしやれ。大名、遣るまいぞ、遣るまいぞ。(狂言記)

六月九日
治承四年。

福原

神戸市。

源氏の大將

源氏物語の主人

公。

明石

明石市。

白浦、吹上、和

歌の浦

和歌山縣海草

郡。

住吉

大阪市住吉區。

高砂、尾上

兵庫縣加古郡。

實定卿

藤原氏。公能の

子。穎敏にして

才學あり。正二

位左大臣に至

り、建久二年薨

す。世に後徳大

寺左大臣と稱

す。(一七九九年

一八五一年)

二二 淺茅が原

六月九日の日新都の事始、八月十日の日上棟、十一月十三日遷幸と定めらる。舊き都は荒れゆけど、今の都は繁昌す。あさましかりつ



る夏も暮れて、秋にも既になりけり。秋もやうやう半ばになり行けば、福原の新都にましましける人人、名所の月を見むとて、或は源氏の大將の昔の蹤をしのびつつ、須磨より明石の浦づたひ、淡路の迫門をおし渡り、繪島が磯の月を見る。或は白浦、吹上、和歌の浦、住吉、難波、高砂、尾上の月の曙を眺めて歸る人もあり。舊都に残る人人は伏見、廣澤の月を見る。中にも徳大寺の左大將實定卿は舊き都の月を戀ひて、八月十日あまりに福原よりぞ上り給ふ。

近衛河原

鴨川の西岸にて、近衛通の東。

大宮

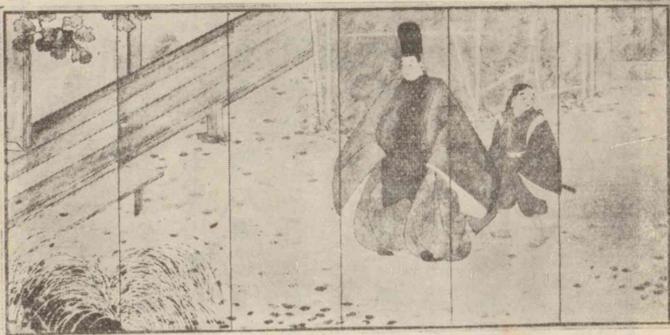
近衛天皇の皇后藤原多子。實定の妹。書畫音律に通ず。建仁元年崩す。(一八〇〇年—一八六一

優婆塞の宮云

源氏物語宇治十帖のうち、橋姫の巻に見ゆ。桐壺帝の第八皇子。

何事も皆變りはてて、稀に残れる家は、門前草深くして庭上露滋し。蓬が杣、淺茅が原、鳥のふしどと荒れ果てて、蟲の聲聲怨みつつ、黄菊、紫蘭の野邊とぞなりにける。今故郷の名残としては、近衛河原の大宮ばかりぞましましける。大將その御所にまゐり、まづ隨身を以て惣門を敲かせらるれば、内より女房の聲にて「誰そや、蓬生の露うち拂ふ人も無きところ」と咎むれば、「これは福原より大將殿の御のぼり候」と申す。さはべらば、惣門は錠のさされて候ぞ。東の小門より入らせ給へ」と申しければ、大將「さらば」とて東の小門よりぞ參られる。大宮は、御つれづれに、昔をや思し召し出でさせ給ひけむ、南面の御格子上げさせ、御琵琶あそばされけるところに、大將つと參られたれば、暫く御琵琶をさし置かせ給ひて、「夢かや現か。これへこれへ」とぞ仰せける。源氏の宇治の巻には、優婆塞の宮の御女、秋の名残を惜しみつつ、琵琶を調べて夜もすがら心を澄まし給へるに、在明

小侍従
歌人。石清水八幡校別當法印紀光清の女。



舊都の月 (筆 陽南乾)

の月の出でけるを、堪へずや思しけむ、撥にて招き給ひけむも、今こそ思し召し知られけれ。

小侍従と申す女房もこの御所にぞ侍らはれたる。大將この女房を呼び出でて昔今の物語どもし給ひて後、小夜もやうやう更け行けば、ふるき都の荒れ行くを、今様にこそ謠はれけれ。

ふるきみやこを 来てみれば

淺茅が原とぞ あれにける。

月のひかりは くまなくて

あき風のみぞ 身にはしむ。

りければ、大宮をはじめ奉りて、御所中の女房たち皆袖をぞ沾され

ける。さる程に、夜もやうやう明けゆけば、大將いとま申して福原へぞ歸られける。(平家物語)

我が眺めつつある月は、昔の人も眺めたる同一の月なりとの意識は、管に過去世の觀念を實にして、同情の強さを増す力あるのみならず、月その物に對しても一種の親しき他ならぬ感情を覺ゆべし。されば月を介して吾人は古人の心情を感得するの思あるなり。國破れて山河ありと謂ふと雖も、もしも天上の明月長へに渝らざるに較ぶれば、山河も猶桑滄の變あるを免れじ。されば人生古今の盛衰を瞰下して、自らは一分の隆替を感ぜざる月が、過去世の追憶に際して最も有力なる媒介者たるは極めて自然の事なるべし。月により遠人を懷慕するの情も同一の起原を有すべし。過去世の追憶、遠人の思慕、これ等は月の聯想としては、恐らく何人も覺ゆることならん。この聯想は精神全體の沈鬱悲哀なる後景と相應じ、月夜の感慨に一層の深さを加ふる力あり。もろもろの詠歎は、この聯想の絲をたどりて、一種の幽渺なる安慰を吾人に與ふべし。(高山樗牛)



平家藏鳥納經

平家の都落
 壽永二年七月、
 南都の餘燼
 治承四年二月平
 重衡、奈良法師
 を攻めて、その
 寺を焼く。
 墨股の勝鬨
 壽永元年三月平
 知盛等、源氏を
 美濃の墨股川に
 破る。
 木曾云云
 壽永二年七月義
 仲、叡山に據る。
 み吉野の云云
 古今集、跡者不
 詳「み吉野の山
 のあなたに宿も
 がな世のうき時
 のかくれがにせ
 む」。

二二二 平家雑感

一 都落

およそ世に傳へ遺されたる歴史は多かれど、平家の都落ばかり



哀にも目醒ましきはなかるべし。南都の
 高餘燼いまだ冷めず、墨股の勝鬨なほ響き
 ぬるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎、
 牛はや比叡のあなたに充ち滿ちぬ。宇治、淀
 の備もろくも潰えて、都も今を限とぞ見

えける。あはれ、一門の天下身を置くに處なし。世はかく憂きをみ吉
 野の山のあなたにも隠處は無きか。いざさらば己みなん。都の中に
 ていかにもならんよりは、西國の行幸に御供して、一旦の凌辱を忍
 ばん。あはれ生死も知らぬこの別路、再び歸り來べき都ならねばと

入道相國
平清盛をいふ。

までに哀なりける運命かな。さるにても入道相國の生涯こそ、なかなかに面白かりけれ。

弓矢のいさをしはや畢んぬ。朝家の權柄今はた盛なり。一門殿上にのぼりて六十餘人、私封全國にわたりて三十餘州、攝籙の家は名のみにて、四海の成敗みなここに集まれり。昔は殿上の交をだに嫌はれし人、今は「この人ならでは人にあらず」と唱へられ、三百の禿童は路に往反すれども、京師の長吏、これが爲に目を側つるばかりなり。されば十善の帝王かしこくも外戚に壓され給ひて、八幡、賀茂の御幸は、八重の潮路の嚴島とぞ觸れられける。某の卿が「入る日をも招き返さんずる勢」と書かれしも、げにことわりと覺ゆ。

不敵なる入道は私門の榮えに飽き足らで、世に人も無げにふるまはれけるこそ、ゆゆしけれ。ここに卿相、雲客、流離の難に遇ふもの四十餘人、法皇の御身を以てすら、城南の離宮に射山の嵐をしのば

莊園

石佛

振夫、大臣

散三位以上

参考

四位

十善

不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不惡口、不兩舌、不綺語、不慳貪、不瞋恚、不邪見。

八幡

京都府久世郡なる男山八幡宮。

賀茂

同府愛宕郡なる賀茂神社。

嚴島

安藝の嚴島神社。平氏の尊信せしところ。

城南の離宮に云云

治承三年、後白河法皇を、鳥羽殿に幽し奉る。

射山

姦姑射山の略。上皇御所の稱に用ゐる。

重代の帝座云云

治承四年、福原に遷都す。

十念具足

超中有遊西

方、雖下品

不嫌猶開法

於未敷蓮花之

裏、證中道

未晩先利

於舊棲桑梓之

郷、能至善

提引二導法

界、今日之願

旨、無如斯、乃

至三福業所

せ給ふ中にも重代の帝座俄に動きて、愛宕の里のあはれをとどめけるこそ、なかなかにあさましかりしか。

寸念具足超中有遊西方、雖下品不嫌猶開法於未敷蓮花之裏、證中道未晩先利於舊棲桑梓之郷、能至善提引二導法界、今日之願旨、無如斯、乃至三福業所

平清盛の直垂に、萌黄匂の鎧著て、連錢蘆毛の馬に、金覆輪の鞍置かせたる容儀、帶佩こそ、あつはれ平門隨一の貴公子と見えつれど、富士川の水鳥に算を亂せる十萬餘騎は、いたづらに長き世の笑をとどめたるに過ぎず。加ふるに北土俄に雲亂れて、木曾の山氣やうやく都に逼り、兩山の衆徒また既に反覆の色を示しぬ。平家の運命日にますます急なり。

廻^ル池^ノ不^レ限^ト。
 敬^ス白^ス。
 長寛二年九月
 日
 弟子從二位
 行權中納言
 兼皇太后宮
 大夫平朝臣
 清盛敬白
 維盛
 重盛の子。平氏
 都落の後高野山
 に到りて僧とな
 る。(一八二〇
 年)
 兩山
 叡山と奈良と。
 保平
 保元、平治の略。
 小松の内府
 内大臣平重盛。
 世に小松殿と稱
 す。治承三年七
 月薨す。一七九
 八年—一八三九
 年)

時しも入道は病にかかりぬ。あはれ病の床のさびしきに、霜夜の
 鐘の響の枕に沈む時、安藝守の昔より太政入道の今に至るまで、六
 十四年の生涯を靜に憶ひ出でたる時、しかして命の際の身ぞと觀
 じたる時、彼果して如何の感慨をか催しけん。一代の榮華身にあま
 りて、保平のいさをし復いふに足らずと思はざりしか。おのれにつ
 らかりける人人を、かくまでに惱ましたることの、罪深しとは思は
 ざりしか。幾度か帝座を驚かし奉りしはては、軍兵を擁して法皇を
 幽閉し參らせつることの中にも、非道の所行なりとは思はざりし
 か。更に小松の内府が身命にかへて、乃父の罪業を救はんとせし至
 孝の情に想ひ到りて、恩愛のきづなにうたた悔恨の心を動かすこ
 となかりしか。佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六慾煩
 惱の絆を離れんずる大事のきはに、今生の名利を棄てて未來の淨
 樂を欣求する一念を發することなかりしか。皆あらず。入道は死に

眼耳鼻舌身意の
 六根の慾。

死して云云
 ローマのキケ
 ロ、その友スキ
 ビオの死を弔し
 ていはく、「死せ
 りと雖も尙生
 く」と。

至るまでその初念を翻すことなく、まさにその生けるが如くにし
 て死せしなり。
 今はこの詞にいはく、兵衛佐頼朝が首を見ざりつるこそかへすが
 へすも遺憾なれ。われ死したりとて佛事孝養をもすべからず、堂塔
 をも建つべからず。いそぎ討手を下し、かれが首を刎ねてわが墓前
 に懸けよ。これぞ、われに對しての今生、後生の孝養にてはあらんず
 る」と。一念の執著に必衰の運命をもともせず、三世の因果を身に
 惹くとも、なほ怨敵に報いんことを必せり。その事の可否は姑く措
 き、とまれかくまれ丈夫たる心の強きは感すべきなり。たとひ四海
 の波を翻してかれが頭に注ぐとも、なほこの一我をいかにともす
 ること能はざらん。六尺の眇軀ここに至れば、天地の大にも比ぶべ
 く、運命われにおいて浮塵に倅しからん。いはゆる死してしかして
 生けるものといふべきか。(高山樗牛—樗牛全集)

詠歌

太上天皇

後鳥羽上皇

藤原定家朝臣

歌人。俊成の子。

新古今集新勅撰

集の撰者。正二

位權中納言に至

り、世に京極黃

門と稱す。仁治

二年八月薨す。

(一一八二—一一九〇年)

藤原秀能

歌人。和歌所寄

人。承久の亂に

大將軍に任ぜら

る。亂後熊野に

て出家し、仁治

元年五月卒す。

(一一八四—一一九〇年)



(筆恭爲)家定原藤

三三 嵐も白し

みよしのねの橘ちりまきり

た上天皇

あらしもささきまきのりほの

藤原定家朝臣

尺わさばさそくみもなるまわり

うらねとよかのむねのむね

藤原秀能

夕月夜まほしきまきのりほの

あらしもささきまきのりほの

藤原家隆朝臣

たかかへるゆ

めのだとぢに

なしへなくう

てなのはなの

すまのうはつ

みねなれや

あははらうら

そらゆく月のすまのうはつ

藤原雅経

うほりゆく雲の流のせりすれり

詠下品上生和歌

民部卿藤原家

あははらうら

そらゆく月の

すまのうはつ

みねなれや

筆家定原藤

藤原家隆朝臣
歌人。定家と名
を齊しうす。新
古今集撰者の一
人。宮内卿従二
位に進み、世に
壬生二位と稱
す。嘉禎三年四
月薨す。(一一八〇
八年—一一八七
年)
詠下品上生和歌
民部卿藤原
定家
たちかへるゆ
めのだとぢに
なしへなくう
てなのはなの
すまのうはつ
みねなれや
あははらうら
そらゆく月の
すまのうはつ
藤原雅経
歌人。新古今集
撰者。従三位參
議に至る。又職
翰をよくす。家
を飛鳥井と稱
す。(一一八八一
年)

正木の子
まきまのこ

寂蓮法師

歌僧。俗名藤原定長。藤原俊成に養はれしが、定家生まるるに及び、遁れて僧となる。建仁二年寂す。(一一八六一年)

詠二首和歌

沙彌寂蓮

行路水

たび人のあさゆくさわのうすどほりむすびかけるあどしらるゝ夕炭爐
みねとほくたちずさみたるけぶりかない
あぢやおもふまきのすみ

鴨長明

鴨社の禰宜。菊太夫と稱す。和歌所寄人たりし

詠二首和歌

行路水

そふ人のあさゆくさわのうすどほりむすびかけるあどしらるゝ夕炭爐
みねとほくたちずさみたるけぶりかない
あぢやおもふまきのすみ

寂蓮法師筆

ちつりまきよけうごこの

寂蓮法師

むらあけ海もふひねもこの海も

きわつちのぼる木のゆかれ

鴨長明

けつはわきのさぶらけくれが

月もなづれをうけてうまむ

同所寄人、舟と所

攝政を政を

人すねる破ひせきやの移びさし

あれよーほちうあはれ

宮内卿

花さうつひらのうせきまきり

こごゆわねのほこゆつとぞ

皇太后宮太夫俊成

ゆつれがのひあさうせき

うげれうきりほさひけ

西行法師

こころれきみもあれをうまきり

こごなつそけのちれゆかれ

が、後難髪して蓮風と稱す。建保四年寂す。(一一八四年一一八七六年)

攝政太政大臣

藤原良經。兼實の子。博く衆藝に通じ、最も和歌に長ず。世に後京極攝政と稱す。建永元年三月暴に薨す。(一一八二九年一一八六六年)

宮内卿

歌人。師光の女。後鳥羽天皇の宮女。又文及び畫を善くす。

皇太后宮太夫

俊成

歌人。藤原俊忠の子。千載集の撰者。正三位に進み、五條三位と稱せらる。後難髪して釋阿といふ。元久元年

殺す。(一七七四年—一八六四年)

源博雅

音樂家。(一五七九年—一六四〇年)

兵部卿親王

克明親王。醍醐天皇の皇子。

逢阪の關

山城近江の國境なる逢阪にあり

敦實親王

宇多天皇第八皇子。(一五五三年—一六二七年)

二四 流泉啄木

今は昔、源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の皇子兵部卿親王の子なり。よろづの事やんごとなかりける中にも、管絃の道になむ極みたりける。琵琶をも微妙に弾きけり。笛をもえもいはず吹きけり。この人、村上の御時に殿上人にてありけり。

その時に、逢阪の關に一人の盲庵を造りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の御宮の雜色にてなむありける。その宮は宇多法皇の皇子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を弾き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなむ微妙に弾く。

然る間、この博雅、この道を強ちに好みて求めけるに、かの逢阪の關の盲琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞かまほしく思

ひけれども、盲の栖まことやうなれば行かずして、人をもちて内内に蟬丸にいはせけるやう、など思ひかけぬ處には住むぞ。京に來ても住めかし」と盲これを聞きて、その答をばせずしていはく、

よの中はとてもかくても過してむ

宮も藁屋もはてしなれば

と、使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、いみじく心に、くく覺えて思ふやう、我強ちにこの道を好むによりて、必ずこの盲に會はむと思ふ心深し。それに盲命あらむことも測り難く、また我も命を知らず。琵琶に流泉、啄木といふ曲あり。これは世に絶えぬべきことなり。唯この盲のみこそこれを知りたるなれ。構へてこれが弾くを聞かむと思ひて、夜かの逢阪の關に行きにけり。されども蟬丸その曲を弾くことなかりければ、その後三年の間、夜な夜な逢阪の盲が庵のあたりに行きて、その曲を今や弾く今や弾くと密に立

劉 改印

琵琶
掃部頭 貞敏

入唐
廉承武

幾何 軌跡 及旧教科書八十五頁迄ノ定評アリ

ち聞きけれども、更に弾かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少しうはかがりて、風少し打ち吹きたりけるに、博雅あはれ今宵は興あり。逢阪の盲、今夜こそ流泉、啄木は弾くらめと思ひて、逢阪に行きて立ち聞きけるに、盲琵琶を掻き鳴らして、物あはれに思へる氣色なり。博雅これを極めて、嬉しく思ひて聞く程に、盲ひとり、心を遣りて詠じていはく、

逢阪の關のあらしのはげしきに

とて琵琶を鳴らしたるに、博雅これを聞きて、涙を流して、あはれと

思ふこと限なし。盲獨言にいはく、あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬすき者や世にあらむ。今夜心得たらむ人の來よかし。物語せむ」といふを、博雅聞きて聲を出だして、王城に在る博雅といふものこそこれに來たれ」といひければ、盲のいはく、かく申すは誰にかおは

すと。博雅のいはく、我はしかじかの人なり。強ちにこの道を好むによりて、この三年この庵のあたりに來つるに、幸に今宵汝に會ひぬ」と。盲これを聞きて喜ぶ。その時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅流泉、啄木の手を聽かむといふ。盲故宮はかくなむ弾き給ひし」とて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、唯口傳をもてこれを習ひて、返す返す喜びて曉に歸りにけり。

これを思ふに、諸の道は唯かくの如く好むべきなり。それに近代はげに然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸卑しきものなりと雖も、年頃宮の弾き給へる琵琶を聽きて、かく極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりなければ、逢阪には居たるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始まれるなりとなむ語り傳へたるとや。(今昔物語)

二五 鏡花水月

慶長の頃、日本の商船明へ渡りしに

郎、在固陵、妾在越溪、海棠花發、或東或西、

と人毎に謠ひけるが程なく歸りて聞けば此方にては、

父はあづまへ子は不知火へ

さくら花かやちりぢりに、

と謠へりとぞおもふにこれは偶合にあらずして翻譯ならん。但その譯法の精妙さは始ど瀉瓶して傳ふるが如く一字を差へず。その篇法といひ表現法といひ彼我同一の模型より打ち出したらんかと疑はる。意詞調の三拍子打ちも揃ひて、眞箇の黄絹幼婦や。

副島士定
徂徠派の詩人。

副島士定が箱根八里はの民謠を譯して、
關山八十里、雖險猶有路、不似大井河、渺漫動難渡。

香川景樹

歌人。京都の人。
桂園又東塙亭と號す。天保十四年二月歿す。(一四二八年—二五〇三年)

といへるは、ひたすら原作の意に親切ならんことを欲して、その言外に躍動せる當時の慘たる旅情を描出し得ざるを憾む。香川景樹の譯歌、

箱根山馬にのりても越えにしを

わたりかねたる大井がはかな。

に至りては、原作の有する眞實味も情調も節奏も、杳として尋ぬべからず。蓋し凡作の甚しきものならん。

後徳大寺左大臣の時鳥鳴きつる方を眺むれば唯あり明の月ぞ残れるは時鳥の歌としては秀詠に屬す。これを藻風の翻譯したる

さてはあの月が鳴いたか時鳥。

は、原歌に對して即不即の間、更に別様の意趣を生じ、尖奇流石に喜ぶべしと雖も、その風格の遙に劣れるをいかにせん。

芭蕉の句、

芭蕉
俳人。正風の祖。
松尾氏、名は宗房、桃青、風蘿等の號あり。伊賀

藻風

俳人。可部見房と號す。東故の門。生死年代不詳。

の人。元祿七年十月大阪に歿す。(二三〇四年—二三五四年)
三井寺
園城寺の俗稱。滋賀縣大津市にあり。天台宗寺門派の總本山。

鎌倉の大臣
源實朝のこと。
眞淵
國學者。賀茂氏。遠江の人。江戸に住す。國學四大人の一。明和六年十月歿す。(二三五七年—二四二三年)

原久胤
國學者。本居春庭の門人。相模の人。

王荆公
宋の政治家、文學者。名は安石、字は介甫、半山と號す。神宗の時相となりて荆國公に封ぜらる。元祐元年四月歿す。(西曆一〇二一年—一〇八六年)

頓阿
歌人。俗名二階堂貞宗。元中元年三月歿す。(一〇四四年)

三井寺の門たたかばやけふの月。
は僧敲月下門の翻譯なり。

蜻蛉やとりつきかねし草のうへ。
は風蒲獵獵弄輕柔欲立蜻蛉不自由の翻譯なり。

何の木の花とは知らず匂かな。

は伊勢の山田にての作にして、西行が「何事のおはしますか」は知らねどもかたじけなさに涙こぼるるの奪胎なり。

鎌倉の右大臣の「月見れば衣手さむし更科や姨捨山のみねの秋風」の詠に對する眞淵の、

東路は衣手さむし白雲の

あははが嶽の秋の初風。

は換骨なり。原作佳ならざるにあらず、しかも更に優る事數等の妙あり。その點加したる白雲のあはだつ景致は、ここに一段の生采を

生じて、雄渾瑰麗一誦翠嵐の面を拂ふを覺え、再讀秋氣の骨に徹して寒きを感じ、縣居翁獨擅の勝場。

原久胤が歌、

春の夜は更けにけらしなおぼしまに

うつろふ花のかげぞめぐれる。

は、王荆公の「春色惱人眠不得、月移花影上欄干」の句を譯述して、殆ど原作の壘を摩せんとす。かの許六の、

欄干にのぼるや菊の影法師。

に至つてはまたその變化の妙を見る。

荻の葉に聞かぬもさびし蘆そよぐ

浦のみなとのあきのゆふ風。

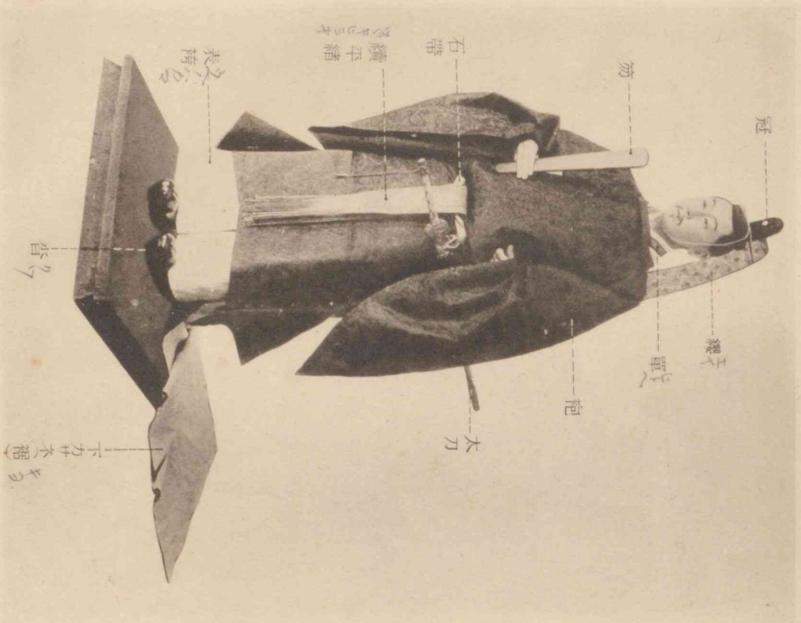
は頓阿の歌なり。風の音を寂しと聞くは古來の常套、今はそれを逆寫して却つて聞かぬを寂しといへるは、腐を化して新となすの手

太田垣蓮月
歌人。名は誠。京
都の人。明治八
年十二月歿す。
(一四五年—
二五三五年)

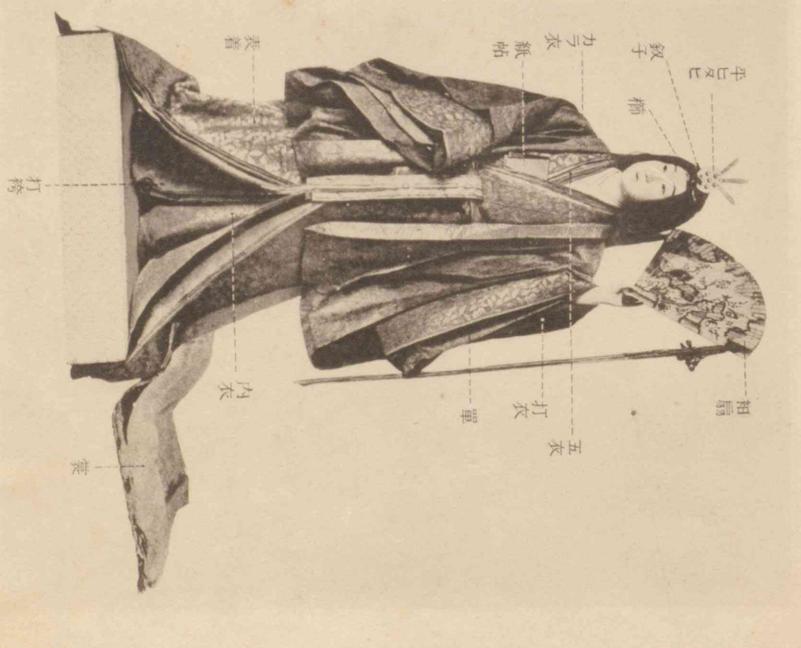
段なり。太田垣蓮月が一世の傑作と稱せらるる。
山里はまつの聲のみ聞き馴れて
風吹かぬ日はさびしかりけり
は前首より胚胎し來たれるものなる事は明白なり。しかも湊の風
よりは松の聲はるかに高き響を傳ふ。蓋しこの細く枯びたる風體
が、その内容をいかにも如實に表現し得たるが故なるべし。

(金子元臣—歌がたり)

中等國語讀本 新修二版卷七終



東裝官文代時安平



東裝官女代時安平

代			代
一八〇〇			
高倉、安德	二條、六條	近衛、後白河	鳥羽、崇徳 光仁
隆家原藤		家定原藤	菅原在
然		法	遍
行		西	小野小
成俊原藤			
明長鴨			
【歌論】	千載集(八四七)	山家集	詞花集(八四四)
	大鏡	榮華物語	今昔物語
			【神樂歌】
			凌雲集

上古中古文學一覽

卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八	卷九	卷十
...

昭和四年十月五日
 昭和五年十月八日
 昭和五年十月四日
 印刷發行
 發正印刷
 訂正發行



發行所

東京市神田區錦町一丁目
 振替口座東京四九九一番

印刷者

發行者

編者

編者

株式會社
 明治書院

細谷祐三

東京市神田區三崎町三丁目十二番地

取締役社長 三樹退三

株式會社 明治書院

金子元臣

落合直文

定價		
自卷一	自卷四	自卷一各
至卷四	至卷七	至卷十
各金六拾四錢	各金六拾錢	各金六拾壹錢

中等國語讀本(新修二版)

電話神田(25)三六九六

